

政治学 研究

慶應義塾 29号 学生論文集

'00.3.27 法学部政治学科開設百周年記念

図書館

政治学科開設百年記念事業一覧
卒業論文一覧(平成十年度)

清浦内閣の一考察	清浦内閣の一考察
西洋文明と日本の価値観の邂逅	西洋文明と日本の価値観の邂逅
紛争をめぐる国際環境と法	紛争をめぐる国際環境と法
クリントン政権初期の外交政策とメディアの影響	クリントン政権初期の外交政策とメディアの影響
日本の情報公開について	日本の情報公開について
政府規模循環理論	政府規模循環理論
流行と情報のメカニズムに関する一考察	流行と情報のメカニズムに関する一考察
自由の二十世紀的展開	自由の二十世紀的展開
第一期クリントン政権における	第一期クリントン政権における
国連平和維持活動利用構想	国連平和維持活動利用構想
規制改革の政治学	規制改革の政治学
APEC成立をめぐる国際関係	APEC成立をめぐる国際関係
制度伝播論	制度伝播論
戦後日本の訪問外交	戦後日本の訪問外交
ジェンダーと法	ジェンダーと法
アジアの開発体制	アジアの開発体制
明治十年代の地方財政にみられる三新法体制の影響	明治十年代の地方財政にみられる三新法体制の影響
現代日本政治過程研究	現代日本政治過程研究
大津事件と日本のマスメディア	大津事件と日本のマスメディア

玉井研究会	小林研究会	笠原研究会	小此木研究会	大沢研究会	池井研究会	鷺田任邦	島中達弘	西富亮介	西川賢	新美篤志	寺町幸枝	清水重裕	佐々木重夫	清原聖子	村田祥子	渡辺勝一	清水唯一朗
-------	-------	-------	--------	-------	-------	------	------	------	-----	------	------	------	-------	------	------	------	-------

慶應義塾大学法学部
政治学科ゼミナル委員会編

SEIJIGAKU KENKYU

Studies in Politics

by Undergraduate Students, Faculty of Law,
KEIO University
No. 28 1998

CONTENTS

Articles	
Tutsi and Hutu	
-thinking about Rwandan politics of the future-	ISHIYAMA, Yosuke(1)
The Schengen System: Europe under Surveillance	ITO, Naoki(29)
Judicial Review and Constitutional Litigation	GOTO, Masakuni(41)
The Direction of the Democratization (in) Saudi Arabia	SAKURAI, Tomoya(59)
Conservative Think-Tank as a policy-making organization during the Reagan Era	SAWADA, Aya(79)
The Political Structure of European Monetary Integration: The Meaning and the Political Process of the Stability and Growth Pact	TSURUOKA, Michito(99)
The Possibility of "Microstoria" -Does God dwell in details?-	HORIKAWA, Ako(123)
Is ODA effective?	MOCHIDUKI, Shin and ITABASHI, Kazufumi(139)
Whaling Negotiation Under Japanese Diplomacy	IKEI Seminar(159)
Art and Freedom of Expression	OSAWA Seminar(177)
Investigating the re-definition of U.S.-Japan mutual security relationship	OKONOGI Seminar(191)
The sanitary adminidtration in Meiji era -by way of example of countermeasure against cholera-	KASAHARA Seminar(215)
The Analysis of the Process in Contemporary Japanese Politics	KOBAYASHI Seminar(229)
The reaction to tripartite intervention 1895 -Viewed from Japanese media-	TAMAI Seminar(251)
Titles of Graduation These for the Academic Year 1997(263)

Edited by Student Committee of Political Science Seminars,
Faculty of Law, KEIO University
Mita, Minato-ku, Tokyo 108-8345

平成十一年三月二十日 発行

規制改革の政治学

一九九一年連邦預金保険公社改善法提案にみるアイディアの政治

西富亮介 185

APEC成立をめぐる国際関係

アジア太平洋アイデンティティの形成と国益追求の論理の交錯

島中達弘 209

制度伝播論

台湾・韓国の輸出加工区を事例に

鷲田任邦 229

戦後日本の訪問外交

首相の外遊を中心として

池井研究会 251

ジェンダーと法

アジアの開発発体制

大沢研究会 269

明治十年代の地方財政にみられる三新法体制の影響

小此木研究会 289

現代日本政治過程研究

現代日本の政治不信

笠原研究会 309

大津事件と日本のマスメディア

卒業論文一覧(平成十年度)

小林研究会 333

399

395

玉井研究会 373

政治学科開設百年記念懸賞論文 最優秀

清浦内閣の一考察

貴族院の政治対立

清水唯一朗

(玉井研究会四年)

- 問題の所在
- 一 清浦「貴族院内閣」の成立
- 二 貴族院の反清浦運動
- 三 清浦内閣の総辞職と田中義一擁立運動
- 結語

問題の所在

大正時代は政党政治の時代であったといわれる。確かに原敬政友会によって日本憲政史上初の本格的政党内閣が成立したが、その後継たる高橋是清内閣は閣内対立から早々に崩壊し、以降、加藤友三郎、第二次山本権兵衛内閣と、特定の政党によらない中間内閣が続

き、政党政治は一時的に後退を見せていた。このような中で大正三(一九二四)年一月に成立した清浦奎吾内閣は「貴族院内閣」と称され、「特権内閣批判」を掲げた第一次護憲運動の標的となり、結果として護憲三派以降の政党内閣時代への引き金となった内閣として知られている。

しかし「貴族院内閣」の呼称とは裏腹に、清浦内閣は貴族院全体からの支持を集める事ができなかった。当時、貴族院内には貴族院改革に代表される特権批判への危機感と、既成政党不信から起こった新たな政権を模索する動きがあった。清浦内閣はこの動きの一部が表出したものに過ぎなかったのである。そのため、清浦内閣は政治路線を異にする貴族院内の他勢力からも批判を受けることとなった。

以上の背景を踏まえ、本論文は、清浦内閣成立前後を通じた貴族

院の対応を考察する⁽²⁾。特に組閣の経緯を通して清浦内閣誕生に対する院内の動搖を明らかにし、さらに院内第二勢力である公正会幹部阪谷芳郎を中心とした清浦首相への辞任勧告運動と、院内における最大会派であった研究会幹部水野直を中心とした田中義一擁立運動に焦点を当てることにより、内閣の有力な権力基盤となるはずであった貴族院内に政治対立が存在し、それが内閣の権力基盤を弱めたことを明らかにしていく。

一 清浦「貴族院内閣」の成立

貴族院内の政治対立を考察するためには、まず、その政治活動が活性化するまでの経緯を概観しておく必要がある。貴族院が政治活動を活発にしていたのは、大正前期、原敬政友会内閣の時であった。二院制の政治体制においては、貴族院を味方としない限り任意に政策を実行できないと考えた原は積極的に貴族院工作を推進した。すなわち、政友会系である交友倶楽部のほかに、貴族院の最大勢力である研究会を懐柔したのである。研究会を構成する子爵団には旧小藩主家出身者が多く、その団結は固く政治力も大きかった。

原の貴族院工作によって、研究会は積極的に政治に関与する事となった。この政治参加の動きは貴族院全体に波及し、貴族院の政治活動を活発なものとした。数で劣る伯爵団の甲寅倶楽部は、発言力強化を図って研究会と合同した⁽¹⁾。他方、男爵団は「不偏不党」という貴族院の不文律を破った研究会に対し反対の姿勢を明確にし、公

正会を結成して対抗した。この過程において貴族院の各会派は衆議院の政友と結び付いていった。「貴族院の政友化」である。この後、政権は加藤友三郎、第二次山本権兵衛と特定の政党によらない中間内閣が担当した。政党に代わって内閣の「与党」となったのは貴族院、とりわけ研究会であった。加藤内閣が研究会の全面支援によって、陸海外以外の全閣員を貴族院によった「貴族院内閣」を組織したため、研究会は政権の恩恵に浸った。しかし、続く山本内閣は貴族院によらない内閣となり、研究会は一旦政権から遠ざかることとなった。加藤内閣において政権の旨みを知った研究会にとつて、山本内閣は不遇な時代となったのである。

しかし、大正二年二月二七日に起きた虎ノ門事件によって山本内閣は総辞職した。再び政権参画の芽が生じた研究会の後継内閣運動は、早くも二九日に顕在化した。一方、中間内閣が二度も続いたことから、各政党も今度こそ政権が自らに降下するものと期待をよせた。なかでも政友会には、元老西園寺公望の周辺から高橋は清総裁を首相として奏請することが示唆されており、政友会の本命降下への期待は高かった。しかし、政友会では高橋は清内閣の改造問題以来、高橋総裁の更迭を図る改革派と高橋を支持する非改革派が対立しており、政権政党としての安定感に欠けていた。確かに、二九日には非改革派幹部の野田卯太郎の指示で、改革派幹部の中橋徳五郎が元老西園寺公望の意向を確認に向かうなど、一時は改革派も高橋への大命降下に対し意欲を見せ、党内融和への期待が生まれていた。しかし、新聞各紙が清浦を最有力候補と連日報じたことこそ

の期待は薄れていった。すなわち、改革派が清浦内閣への参画を企図し、研究会との連繋による「政研連合」へと動き始めたのである。清浦に大命が降下した場合、研究会がその支持母体となることは明白であった。清浦自身が子爵であり、研究会初期の幹部であったからである。ここにおいて、政友会改革派と研究会が政権獲得のために連合した。研究会側では幹部の小笠原長幹、大木遠吉の両伯爵を中心に「政研連合」が試みられた。改革派の中心人物である床次竹二郎は、清浦が組閣した場合には入閣も辞さないことを研究会側に伝えて意欲を示した。また、改革派にとつて「政研連合」は、政友会内での実権を非改革派から奪取することでもあった。

研究会は右に述べた「政研連合」を武器として元老に対して清浦擁立運動を展開していった。二九日には小笠原が西園寺を訪問して「政研連合」を入説し、首相候補に清浦を推薦し、翌三〇日にはやはり幹部の水野と青木信光が西園寺を訪問して「政研連合」を説いた。

しかし、研究会は「政研連合」以外の政権獲得策も模索していた。田中義一陸軍大将の擁立運動がそれである。水野、青木、福原俊丸といった幹部が、公正会幹部の池田長康や政界のブローカーとして知られる西原亀三と共に田中の擁立を画策していた。水野らは山本内閣辞職の二八日から田中義一内閣に向けて運動を開始したと見られる。「西原亀三日記」によれば、「三十日(日) 池田男郎にて福原男と鼎坐後継内閣に関する意見を交換し、田中内閣の成立に努力する事を誓ふ」⁽²⁾三十一日 青木・水野両氏西園寺公訪問の状況を

水野子より聴取し、田中大将に委曲を報告する処あり」とあり、三十日の青木・水野・西園寺会談で田中擁立も話題となった事が窺われる。また、田中自身も西園寺に運動していた形跡がある。清浦内閣成立直後の一月二五日の西園寺から田中に宛てた書簡には、「時局に関する御開示の件、委曲野田卯太郎より御開取されたし」とあり、同封の野田に宛てられた書簡には田中に対して自重を求めるよう記されている。清浦の組閣後も田中が政権への意欲を捨てずに行動していた事が窺われる。

大正一三年元日、清浦は宮中に参内し内閣組織の大命を受けると即座に枢密顧問官の有松英義を招聘した。有松は山県閥色の濃い内務官僚出身者であり、清浦とは長く政治行動を共にしてきた盟友であった。清浦は有松に内相就任と組閣参加を要請し、有松は清浦を支持し協力する旨の返答をした。こうして清浦内閣は有松によってその最初の組閣作業を開始した。

翌二日正午に有松が組閣本部のある枢密院事務局に向くと、研究会領袖の青木・大木と清浦の会談が行われていた。清浦は元老の意向として平田から伝えられていた「政友員を除外した」内閣を構成するために政友会の閣外協力と研究会の支援を必要としていた。このため、「政研合同」による清浦擁立運動を進めていた研究会に協力を依頼したのである。この清浦の要請に対して青木らは、清浦への協力の見返りとして研究会を中心とした組閣を要求し、その了解をもって会内で対応を協議すると告げた。研究会としては会内の議論をまとめるために出来るだけ有利な条件を引出す必要があったの

であろう。また、青木らは「且有説有松と憲政会相親者、有松入閣之可否不能無疑云云」と有松の關係からの除外を求めた。清浦内閣成立に腐心してきた研究会からすれば同会を中心に組閣を行うことはいわば論功行賞であり、運動と無縁であった有松が組閣の中心となつてゐることは不愉快であつたのだから。有松はこの要求を清浦から聞き、組閣から撤退する意向を伝えた。

この組閣の混乱ぶりによつて清浦は自信を喪失し、二日夜、組閣大命拝辞を決議した。翌三日午前に研究会へ拝辞の意向を伝えたのち宮中に参内した清浦は、結局、拝辞の意向を奏上できず再度組閣に取り組むこととなつた。摂政官から「努力するよう」との言葉があつたのである。

有松が再び清浦に呼ばれたのは四日の早朝であつた。ここで有松は憲政会・政友会改革派・研究会の提携による挙国内閣を提言したが、清浦は明確な回答を避けた。そのため有松は午後には予定されてゐる清浦・研究会会談が破綻した場合には再度協力すると言ひ残して帰宅したが、同会談が合意に達したため、有松は清浦内閣の組閣から外れることとなつた。しかし、有松は清浦が挙国内閣構想への態度を曖昧にしたことを奇貨としてその構想を強行した。有松は憲政会員の江木翼を自宅に招き、研究会単独内閣では普選の実施は難しいので同志を集めるよう要請した。有松は、清浦内閣において普選の実施を目論んでいたのである。江木は即座に行動に移り、憲政会では構想参加の是非をめぐる幹部会を開いたといふ。さらに有松は、金杉英五郎を使者として床次にもこの計画を伝え、床次は賛

首相：清浦（奎吾）、外務：藤村（義明、公正会）、
内務：水野（鍊太郎、交友俱樂部）、大蔵：勝田（主計、研究会）
司法：鈴木（喜三郎、無所属）、文部：阪谷（芳郎、公正会）
農商務：前田利定（研究会）、通信：小松（謙次郎、研究会）
鐵道：大木（遠吉、研究会）、書記官長：福原（俊丸、研究会）

（一）内、筆者注。

つまり、この時点で研究会は既に「貴族院各派の人材を網羅」した「貴族院内閣」を想定してゐたのである。陸海以外の全閣僚が貴族院議員で占められ、会派別の構成は研究会四、公正会二、交友俱樂部一、無所属一となつてゐる。ここから三日深夜に公正会を一減し茶話会に与えられたことで、その全「貴族院内閣」としての網羅性はさらに高められた。貴族院各派を網羅する意義は、各派の支持を取り付ける事であつた。研究会は自らを頂点とした全貴族院内閣を目指してゐたのである。

しかし、実際の組閣は困難を極めた。外相候補に挙げた藤村は男爵団公正会の中心人物であり、加藤友三郎内閣下の第四六議会上において日支郵便条約をめぐる貴族院各派が一致協力して行つた「外交刷新決議」の中心人物であつた経緯から外相に推された。しかし、外務省から省出身者以外の人物を大臣に迎えることに対し強硬な反対がなされ、藤村外相案は断念せざるを得なくなつた。これによつて貴族院第二勢力である公正会へのポスト配分が問題となつた。研究会にからすると、藤村の入閣は清浦内閣に対する公正会の

意を表したといふ。しかし、前述の如く清浦・研究会会談がまとまつたことで「英義の画策は水泡に帰し」、憲政会と政友会改革派は空手形を持たされた格好となつた。これにより、ここまで清浦内閣に対する賛否を保留してゐた憲政会が清浦内閣反対の態度を明らかにすることとなつた。清浦内閣と研究会は首相自身の優柔不断によつて政界に波紋を起し、政党から反感を買つた船出をする事となつたのである。

かかる清浦の大命拝辞・再組閣という優柔不断に対し、三日午後
の研究会幹部会は協力の是非をめぐる紛糾した。一度協力を要請しながら相談もなく拝辞を決めた清浦に対する研究会内の不信感は大きく、同会は三日中に結論を出す事が出来なかつた。翌四日も朝から幹部会が行われたが、上原が陸相を推薦し清浦がこれを承諾してゐた事が発覚したため再び紛糾した。この人事が研究会に断りなく行われたもので、研究会中心の組閣という約束に反してゐたからであつた。しかし、正午前には清浦内閣を無条件で支持する事が決定された。研究会に、自らの運動によつて清浦に大命が降下したという自負があつたことが窺える。

研究会による組閣は、「貴族院各派の人材を網羅する」方針の下、本部を枢密院事務局から華族会館に移し、同日午後から開始された。以降、清浦は「一に研究会の了解を得るの止むを得ざるの状態」となり、組閣を研究会に一任した形となつた。水野直の手帳によると、研究会は既に二日の会談において清浦に閣僚名簿案を清浦に提示してゐた。それが示す閣僚候補は以下の通りである。

支持を明らかにするものであり、何としてもその入閣を実現させる必要があつた。そのため、外務以外のポストを拒否する姿勢を見せる藤村に対して、研究会は通相を用意してその懐柔に取り組んだ。当初は農商務が挙げられたが、同大臣に内定してゐた前田が譲渡を拒んだため、大木が鐵道相を小松に譲つて閣外に出ることで問題は決着を見た。研究会では公正会との関係を重視してあくまでポストを配分するか、藤村の入閣を断念するかで議論があつたが、研究会との接近を図る公正会幹部の船越光之丞と池田長康が研究会と藤村の斡旋に努めたため、通相としての入閣となつた。

外相とともに紛糾したのが陸相の選定であつた。それは陸軍部内の対立が組閣に持ち込まれた事によつて起つたものであつた。大正一二年一月二十九日、大森の清浦私邸を同郷の上原勇作陸軍大将が訪問した。上原は、清浦への大命降下の報道に関連して、大命が降下した場合には福田雅太郎大将を陸相とするよう進言し、実際に大命が降下した翌年一月二日に再び同様の申入れを行った。組閣に困難を来してゐた清浦はこの申し入れに対し、渡りに船とばかりに乗つてしまつたのであつた。しかし、陸軍は実権を一手に掌握してゐた山県有朋の死後、大臣を三長官会議によつて推薦する慣例を築きつあつた。上原の要請はこの陸軍内の時流に反するものであつた。当時、陸軍部内は薩摩系の上原派と長州系の田中義一派に二分しており、主導権は田中派にあつた。つまり、この上原の行動は薩派の巻き返しを図つたものであつたと考えられる。

この動きを真つ先に嗅ぎ付けたのは研究会幹部の福原であつた。

福原はすぐさまこれを田中に報じ、四日午前の研究会幹事会にこれを報告した。前述の通り、研究会幹部の水野、青木、福原は、田中内閣の成立を願う勢力であった。彼らは、福田の陸相起用が研究会に全く承諾のないことを理由として退け、それによって陸軍部内における上原派の勢力を弱め、相対的に田中派の勢力を強化したのである。清浦は研究会の猛烈な反対に対し福田の起用を取り下げざるを得ず、結果、組閣に関する発言権を全く失った。組閣は、まさに研究会主導のものとなったのである。

公正会からは、もう一人の閣僚候補として文相に阪谷が挙げられていた。しかし、彼の日記に大臣就任要請の記事は見られない。最終的に文相に就任したのは茶話会の江木千之であった。だが、実は江木が入閣を要請された四日朝には具体的なポストは提示されておらず、具体的に文相が提示されたのは六日のことであった。新聞紙上に藤村の横滑り先として文相が挙げられ、沢柳政太郎が茶話会から文相候補として挙げられている事から見ると、文相ポストは流動的になっていったと考えられる。また、阪谷は政友会と研究会の接近に対して従来から批判的であったから、彼が名簿から消えたことはむしろ当然であったと言えよう。よって、研究会が公正会の反研究会勢力を取込むために阪谷の名前を挙げたものの、首尾よくいかなかったと考えるのが適当であろう。

このような研究会主導の組閣の結果、清浦の当初の意向が容れられたのは書記官長に就任した同郷の小橋一太だけとなった。清浦の内閣に対する指導力は望むべくもなく、内閣の政権基盤は強固とは

内閣の唯一の与党となり、政友会、憲政会、革新倶楽部の三党は清浦内閣を非立憲内閣として批判し、「憲政擁護」をスローガンとした護憲運動を展開することとなる。

反清浦内閣の声は衆議院や世論ばかりでなく、貴族院からも上がってきた。その第一声は岡田良平によるものであった。岡田は無所属ながら憲政会系の議員として知られ、有松による組閣にもその名が挙げられていた。岡田は、清浦内閣は一部の策士によるものであるから「貴族院内閣」と呼ばれることはその非難の矛先を貴族院全体に向けてるものであり迷惑至極であると主張し、研究会による貴族院支配と同会幹部の政権欲を批判した。

本会議においても、第四八議会において佐々木行忠、徳川義親、阪谷芳郎、中川良長らが清浦「貴族院内閣」を批判する演説を行った。佐々木は一月二三日の演説において貴族院を基礎として内閣が組織されたことは立憲制度から見て正しいと考えるのか、と首相の見解を糾した。徳川は同日「我々今貴族トシテ特權ヲ享テ優遇ヲ受ケテ居ル者ガ今ニシテ長夜ノ夢カラ覚メマシテ、奮起シテ、大正ノ革命ヲ断行イタサナケレバ、弥々民心ハ離反イタシマシテ、革命ハ下カラ起ルヨウニナルト信ジマス」と、ロシア革命後国内に社会主義、共産主義思想や運動が台頭したことを背景に、これを革命の風潮と捉えて危惧を呈し、さらに「事ガ茲ニ至リマシテハ、特權階級ノ打破セラレルコト、貴族ノ滅亡トイフモノハ敢テ憂フル足ラナイモノデアアルカモ知レマセヌ、併ナガラ累ヲ皇室ニ及ボシ、国家ノ基礎ヲ危クスルニ至ツテハ、實ニ憂慮ニ堪ヘナイ次第」と、貴族と皇

言い難かった。ここまで見てきたように、清浦はその組閣を着実に行うために研究会に一任しながら、結果として組閣に困難を来すこととなった。さらに、政友会の協力が得られないと判明した時点で不偏不党を決定したものの、閣内に親政友会の水野錬太郎、鈴木、親憲政会の江木千之を抱えたことで閣内不一致の危険を内包していた。研究会は、貴族院各派から人材を得ることで各派の支援を得た実力のある「貴族院内閣」を模索しながら、組閣において各勢力の反対にあったことで、その目的を十分に果たせなかったのである。

二 貴族院の反清浦運動

清浦は大命降下と同時に「時代錯誤」の「特權内閣」として世論から激しい攻撃を受けた。清浦自身が自らの出處を「時代錯誤」であると表明していた経緯もあり、この批判は止むを得ないものであった。批判の声は大命拝辞・再組閣を経て勢いを増していたが、この清浦への個人攻撃は、閣僚が外陸海を除いて全て貴族院議員で占められたことが伝わり、「貴族院内閣」という、貴族院への批判へと変容した。憲政会と革新倶楽部がいち早くこの世論に乗ったのに対し、政友会はその態度を決め兼ねていた。「政研連合」を模索していた改革派が清浦支持を表明したことに対し、それに対抗する形で非改革派が不支持を表明したため、党としての統制のある行動が取れなくなっていたのである。この対立は収束されず、改革派が脱党して政友本党を結成することとなった。この結果、政友本党は清浦

室の存続の危機を述べ、貴族院内閣がかかる革命の流れを加速させる恐れがあると述べた。両者は貴族院改革の主旨者であり、政治権力として肥大化した貴族院の権限を縮小して、本来の「皇室の藩屏」としての貴族院に戻そうと考えていた。直接的かつ積極的の政治に関与するのではなく、チェック機能として間接的に政治に関与することを目指したのである。彼ら貴族院改革派にとって、この「貴族院内閣」の出現は華族・皇族に対する世論の攻勢を極大にし、場合によっては貴族院を廃止することになり兼ねない問題であった。そのため、彼らは早急に清浦内閣を総辞職させる必要があると考えたのである。

この反清浦内閣ムードの中にあつて、公正会の立場は微妙であった。早くから清浦支持を表明し、藤村の入閣に固執したため、清浦内閣に対し冷淡な態度を取ることが難しくなっていたのである。また、会内に政権を取った研究会に接近した船越、池田、藤村と、従来から研究会に対し批判的であった阪谷、東郷、矢吹ら二派があつたことから鮮明な対応を打ち出せないでいた。しかし、公正会としても高揚をみせる護憲運動に無策でいるわけにはいかなかった。七日の幹事会において阪谷芳郎が「貴族院内閣」を批判し、貴族院全体が攻撃対象となることへの懸念と、衆議院との没交渉の危険を説いた。このため、幹事会は、藤村男の入閣について公正会は格別従来の主義方針を変化させる事はないと声明し、従来の「一人一党主義」に変更がないことを明らかにして「貴族院内閣」批判の矛先をかわず努力をした。さらに一日に行われた緊急幹事会は、藤村外

相に入閣経緯の説明を要求した。そして藤村は同会に公式に相談をしなかつたことを確認され、「公正会を代表するものではな」く、「清浦と同郷の關係から入閣した私的な行動」であるとの言質を取られる事となつた。これに対し公正会は「藤村男としては十分にその手腕を振るつてもらいたい」と藤村に伝えた。当面の所策として、清浦内閣の成功と失敗に対し一定の距離をもつて対応できるように玉虫色の態度を取つたのである。また、この申し合わせには当時新聞紙上を賑わせた「研公融和」の噂を牽制する意図も含まれていた。公正会が反清浦内閣を明示する契機となつたのは、貴族院本会議における中川良長男爵の弾劾問題であつた。中川は二二日の本会議において清浦内閣を「一部華族ノ専制内閣アアル、失礼ナガラ清浦子爵ハ此一部華族ノ専制内閣ノ傀儡タルニ過ギズ」として、研究会幹部の「専横」を非難し、さらに清浦首相を「毫碌ノ程度モ大イニ過ギタリ」と中傷した。この演説に対し研究会は制裁を企図し、清浦を中傷した言動が侮蔑的であつたことを理由に、小笠原を委員長とする懲罰委員会において中川を弾劾にかけた。しかし、清浦内閣の組閣が研究会の一部幹部によつて秘密裏に行われたことは明らかであり、世論の批判も集中していた。それにも関わらず研究会が強硬な姿勢に出たことによつて、世論の反研究会ムードはさらに高まりをみせた。これを見て、公正会もついにその態度を硬化させていった。公正会における反清浦運動の中心となつたのは阪谷芳郎であつた。阪谷は義父である渋沢栄一による辞任勧告を清浦が拒否したことを聞くとともに、公正会幹部の池田長康が研究会への転出を申し

ていない」とする声明を発表したが、すでに新聞報道によつて研究会幹部の策動は明らかでありこのような弁明は意味を成さなかつた。研究会は批判の対象となつている水野、青木、小笠原といった大物幹部を下げ、若手の渡辺千冬や世評のよい大河内正敏や松平頼寿を前面に立て、その攻勢に対応した。

このように、時局は清浦内閣に対し極めて不利なものとなつていった。このため、清浦内閣は一月三十一日に突如衆議院解散に踏み切り、五月十日の総選挙において雌雄を決することとした。公正会では親研究会であつた池田が研究会へ転出し、残つた船越は、研究会、清浦内閣を諦め、その衆議院解散を不快と表明するに至つた。こうして、公正会の主導権は反研究会派が掌握することとなつたのである。

三 清浦内閣の総辞職と田中義一擁立運動

清浦内閣に対して起こつた第二次護憲運動はいわゆる護憲三派連合を結成させ、五月一〇日の総選挙に向けて与党政友本党と護憲三派の選挙戦が展開された。しかし、政府、政友本党側の樂觀的な予想に反して結果は護憲三派の勝利に終わった。皇太子御成婚と総選挙という組閣時から抱いてきた二大懸案を遂行したことで、清浦は五月一三日の閣議において選挙の大勢が判明したことを理由に辞意を表明した。閣僚の中には臨時議会で信任を問うべきというものもあり、西園寺からも護憲三派の基盤が脆弱なことを理由に続投が要請されたが、清浦本人の辞意は固く六月七日に内閣は総辞職し、憲

出ていることを聞き、研究会の横暴ぶりに対する怒りを顕にした。清浦内閣辞職と研究会幹部の貴族院支配排除を命題と考えた阪谷は、まずは公正会の関係者である藤村から切り崩す事を考えた。阪谷は、二八日に同会の東郷安、矢吹省三と共に藤村通相を訪問し、通相辞任と内閣総辞職を説いたが藤村はこれを拒絶した。大臣ポストに強い執着を持つ藤村が、ようやく得たその地位を簡単に降りるはずもなかつたのである。

局面は一月二六日に挙行された皇太子裕仁親王御成婚後の議会へと移つていった。阪谷、矢野恒太などが、公正会を中心とした幸四無派の有志議員団による辞職勧告を打ち出したのである。二九日、公正会の幹事会はこの有志団による辞任勧告を是認した。有志団は阪谷、東郷、矢吹、坪井九八郎といった公正会議員の他に、憲政会系の同成会の伊沢多喜男、谷森真男、無所属の徳川義親、岡田良平、黒田長和が参加し、反研究会連合の体を成していた。彼等は翌三〇日の本会議前に院内大臣室に清浦を訪問し、辞職を勧告したが受け入れられず、翌三一日にも同様の勧告をなしたが結果は同様であつた。清浦としては、二大使命のうち衆議院総選挙の公正な実行がまだ残つており、ここで総辞職するわけにはいかなかつたのである。

一方、世論は清浦内閣の成立と組閣における研究会幹部の策動を焦点に、反「貴族院内閣」の矛先を研究会に向けていた。研究会の本部がある華族会館には連日、これを詰問する新聞記者と護憲三派の代議士、院外団が詰め掛けていた。研究会はこれに抗しきれず、二七日に「研究会は、清浦内閣の組閣に際して、何らの策謀も弄し

た。政会総裁の加藤高明を首班とする三派連立内閣が発足することとなつた。

しかし、議席の過半数を得た政党はなく、西園寺も指摘したように、護憲三派内閣の政治的基盤は脆弱であつた。総選挙によつて政権政党を確定し、安定した政党政治を確立するという清浦内閣の目的は達成されなかつたのである。こうした状況は、政界の一部において国民の既成政党不信として受け止められ、その水面下において新たな動きが画策されていった。

その中でもとりわけ際立っていたのが田中義一の擁立運動であつた。既述の如く、田中擁立の動きは従来からあつたが、清浦内閣の敗北が明らかとなつた大正一三年五月になると俄然、田中擁立の動きが顕在化したのである。とりわけ、山本内閣後継運動においては上原擁立に参加していた松本剛吉が、西園寺の肝煎で田中擁立に参加したことが運動を活気付けた。これはこの運動に西園寺の支持があると受け止められたと考えられる。実際に、水野は西園寺の支持があることを前面に打ち出して、運動を活発化させていた。因みに、西園寺から水野に運動支援が伝えられたのは、総選挙直前の五月八日の会談であつた。同会談において、水野はその田中を中心として挙国一致による新党を構想している旨を述べた。水野の構想する「挙国一致」の枠組みは、田中を総裁として政友会・革新倶楽部などの旧長閣を結集し、旧薩派憲政会に対抗するというものであつた。しかし、五月十日の総選挙の結果、護憲三派の勝利が判明すると、水野は新政党を直ちに結成して政権を取るか、加藤高明後継を狙つ

て田中を入閣させるかの選択に迫られた。水野はこの対応を西園寺と協議した。西園寺は、加藤が首相になりそうであるから、とりあえずは憲政会に政権を取らせて、田中はそのに陸相として入閣するのがいいとした。また、水野に対して「諭え憲政会に政権が行つても落胆してはならない、自分は水野等に対して同情を持って居る」と付け加えた念の入れ様は、山本後継をめぐる田中擁立運動に西園寺が冷淡であったことからすると大きな変化であった。

水野は田中新党の実現に向けて構想を具体化していった。彼のメモによれば、新党構想は貴族院、政党、官僚を網羅したものであり、内閣は以下のように考えられている。

首相：田中（義一）、内務：床次（竹二郎）
司法：横田（千之助）、関（直彦）
大蔵：若槻（禮次郎）、通信：中橋（徳五郎）
鉄道：小川（平吉）、農商務：下岡（忠治）

（一）内、筆者注。

この構想を実現するため、水野は政友会の横田、岡崎邦輔、小泉策太郎に働きかける一方、床次に副総理格を用意して協力を要請した。

水野が新党構想のためにとりわけ重点的に働いたと見られるのが、男爵団への運動であった。田中自身が男爵であることから、貴族院を完全に掌握する意味からも、男爵団の支持は絶対条件であった。このため、水野は親和会を公正会に無条件で合同させることにより、

らに、政友会全体の協力を得るために、横田に野田を、高橋には小泉を遣わして新党への理解を求めることとなった。岡崎、野田、小泉といった政友会の有力者たちが水野の運動に呼応したことで、田中新党運動は最早貴族院に止まらず、政界全体に波及していったのである。

その勢いを示すように、政友会以外の政党からも運動への参加が進んだ。二七日には水野、床次、横田、松本剛吉が会談し、床次が政友本党から脱党する意向が報告された。さらに、国家大事の場合には西園寺が自ら出陣する意向を持っていることが伝えられた。政友本党の事実上の党首である床次を迎えたことで、田中擁立運動は、貴族院と、憲政会主導に対する衆議院の不满分子との統合という、反憲政会運動としての性格を合わせ持つ事となった。

この運動を通じて、田中は、果敢な総裁を欲していた政友会から高橋の後継として総裁に迎えられることとなった。これは、政友会の単独内閣への決意表明でもあった。そして、政友会が政友本党との提携をしたため、政友会の協力を事実上失った護憲三派内閣は大正十三年八月一日に総辞職した。

結語

以上、「貴族院の人材を網羅する」方針で組織され、「貴族院内閣」として批判された清浦内閣に対する貴族院の体制について考察し、同院の清浦内閣に対する姿勢が一枚岩でなかったことを、組閣をめぐ

研究会と公正会の融和を図り、男爵団の田中支持を取り付けようとしたのである。因みに、親和会は、大正十一年に研究会に批判的な公正会の勢力を削ぐため、水野が公正会を離脱した中川男爵を中心として結成した会派であった。しかし、親和会は男爵議員互選選挙において健闘したものの公正会の優位を崩すにはいたらず、逆に公正会の反研究会姿勢を加速させる結果をもたらしていた。水野は、この親和会の公正会への「無条件降伏」を、公正会取り込みの好餌と考えたのである。「無条件降伏」の申入れは五月十三日になされた。その申し入れが突然のことでもあり、公正会ではその対応をめぐり数次にわたって協議が行われた。その中心人物が福原と池田長康といった田中擁立派の人物であったことから、この合同に「研公融和」と田中新党へ協力依頼の意図が含まれていたことは明らかである。因みに、福原は研究会が提示した最初の清浦内閣名簿において書記官長に挙げられていた。当時、内閣書記官長は首相の参謀であると同時に、次期大臣への最短コースと考えられていた。これには水野の田中内閣への布石があったと見ることが出来る。

五月下旬に至り、田中擁立運動は本格化していった。二三日、田中郎で新党グループの会合が持たれ、研究会からは水野、池田、福原、近衛文磨が、政友会からは岡崎邦輔、野田卯太郎、小泉策太郎が参加した。同会合では、西園寺の寵愛する近衛を研究会筆頭常務に据え、徳川義親を運動に勧誘することで貴族院方面の協力体制強化が図られた。また、後藤新平を田中と並ぶ総裁格として新党に迎える方針で働きかけることとし、岡崎と野田はこれを了承した。さ

ぐる有松と研究会の対立、公侯爵の議会演説、阪谷を中心とした清浦内閣への辞任勧告、政府、研究会幹部批判に対する同会の対応を通して明らかにした。そこには貴族院における政治対立が存在していた。

政権に対し積極的な姿勢を見せていたのは研究会であった。同会は、清浦によって組閣の中心に据えられた有松に対し難色を示し、同会の幹部による組閣を行った。しかし、その組閣は外相、陸相の人選を中心に難航し、結果、閣僚の大半を研究会から得た、到底「全貴族院内閣」とは呼べない内閣が誕生した。かくして政権に積極的に関与する研究会に対し、徳川ら公侯爵は、「思想悪化」による華族・貴族院への批判の高まりを見て貴族院の存続を重視し、「皇室の藩屏」という本来の貴族院の姿への回帰を図ることでこの批判をかわし衆議院に確固たる憲政の常道を行わせることでこの難局を乗り切ろうと考えた。

かかる清浦内閣に対する貴族院の対応は、同院の政治関与をめぐる路線の対立を顕在化させたが、それは、公正会内の対立とし典型的に現れた。そして、この院内の対立を公正会は体現していた。公正会では、研究会に接近して政権に関与する池田らのグループが清浦内閣成立時には主導権を握ったが、内閣の立場が悪化すると彼らは勢いを失い、代わって「憲政の常道」の重要性を説いて「貴族院内閣」を批判する阪谷らのグループが主導権を取ったのである。研究会自身も、世論の攻勢に対して為す術を持たなかった。最早、貴族院のみに立脚した内閣は不可能となっていたのである。

特筆すべきは、この経験が研究会幹部の水野をして政党、官僚、軍、貴族院を網羅した「挙国一致」内閣の運動、すなわち、田中擁立運動を促進させたことである。この運動は従来から、既成政党に対し不信感を持つ貴族院議員を中心として進められてきたものであったが、護憲三派内閣の成立により、憲政会が事実上の政権を握ったことに不満を持つ政友会へと浸透していった。これは水野が積極的に政党工作を行った結果でもあった。かくして、運動は政党と結びついたことで一挙にその勢力を増して現実化し、「実力内閣」を指す田中新党構想へと進展を見た。こうして翌大正一四年四月、田中は政友会に総裁として迎えられた。田中新総裁の率いる政友会は、翌五月に革新倶楽部と合同、ついで翌一五年二月には政友本党脱党組と合同して政権政党としての勢力を確保し、ついには昭和二年四月に田中内閣を組織するに至ったのである。

- (1) 「貴族院内閣の出現」〔東京朝日新聞〕大正一三年一月五日。
- (2) 大正時代の貴族院についての基礎的な研究としては佐藤立夫「貴族院体制整備の研究」(人文閣、一九四三年)、里上龍平「大正デモクラシーと貴族院」(井上清編「大正期の政治と社会」岩波書店一九六九年)、西尾林太郎「帝国議会と華族の活動」(大震会編刊「貴族院と華族」一九八八年)が挙げられるが、清浦内閣に重点を置いた研究は少ない。清浦内閣成立の過程については西尾「清浦内閣の成立と研究会」(「社会科学討究」九七号、早稲田大学大隈記念社会科学研究所、一九八九年)が挙げられるが、清浦内閣全期間において貴族院内における政治対立に考察を加えた研究は管見の限りないといえる。

- (11) 前掲、「貴族院の政治団体と会派」、一五二頁。
- (12) 大正八年設立。「一人一党主義」を綱領に掲げて研究会と対立した。貴族院解消まで存続。(前掲、「貴族院の政治団体と会派」、一五八―一六四頁)。
- (13) 前掲、「貴族院の政治団体と会派」、一八頁。
- (14) 前掲、「帝国議会と華族の活動」、二七四頁。
- (15) 「時事新報」大正一二年二月九日付夕刊。山本内閣の総辞職が正式に決定するのは三〇日のことである。
- (16) 「政本合同問題備忘」(小川平吉文書研究会編「小川平吉関係文書」、みすず書房、一九七三年、五九七頁)。
- (17) 石上良平「政党史論 原敬没後」(中央公論社、一九六〇年、九四頁)。
- (18) 前掲、西尾「清浦内閣の成立と研究会」。
- (19) 「早くも後継内閣運動」(「時事新報」大正一二年二月三日)など、清浦は最有力候補として各紙に取り上げられている。
- (20) 前掲、「政本合同問題備忘」、五九七頁。
- (21) 同右。但し、小川自身は「政研連合」に批判的であり、説得に来た大木に対してその不可を説いている。
- (22) 前田蓮山編「床次竹二郎伝」(床次竹二郎伝記刊行会、一九三九年、六六五頁)。この政研連合の動きは一九日に研究会幹部の小笠原長幹から西園寺に報告されている。
- (23) 「時事新報」大正一二年二月三日。
- (24) 水野勝邦編「貴族院の会派 研究会政治年表」(尚友倶楽部、一九七五年、九七頁)。

(3) 貴族院男爵議員。大蔵官僚から第一次西園寺内閣の蔵相となる。渋沢栄一の女婿。貴族院屈指の能務家として知られた(吉川弘文館「国史大事典」)。

- (4) 貴族院子爵議員。研究会幹部としての政友会との提携を進め、研究会の勢力を拡大した。策士として知られ、晩年には政友会と革新倶楽部の合同の立役者となった(馬場恒吾「現代人物評論」中央公論社、一九二九年、二二七―四三頁)。
- (5) 玉井清「原敬の貴族院工作をめぐる政局運営」(慶應義塾大学法学研究科論文集「第二四号、昭和六一年度」)。
- (6) 大正元年に設立された勅撰議員による貴族院院内会派。政友会内閣により勅撰された議員による会派であり、貴族院における政友会勢力として活動した。昭和二年の貴族院の解消まで存続。(水野勝邦編「貴族院の政治団体と会派」尚友倶楽部、一九八四年、一七四―六頁)。貴族院は「不偏不党」「一人一党」を主義として掲げていたため政党は存在し得なかったが、院内会派の設立は許されていた。
- (7) 明治二四年に設立された子爵互選議員を中心とする貴族院内会派。加藤友三郎、清浦奎吾内閣を支援した。終始、貴族院の最有力会派であり、清浦内閣の成立時には全三九一議席中一六八議席を占めていた。貴族院の解消まで存続。(同右、一四六―一五四頁)。
- (8) 前掲、「原敬の貴族院工作をめぐる政局運営」。
- (9) 「叙爵内規」(明治一七年七月七日制定)によれば、子爵は「一、一新前家ヲ起シタル旧堂上。一、旧小藩知事即チ現米五万石未滿及ヒ一新前旧諸侯タリシ家。一、国家ニ勲功アル者。」となっている。(大震会編刊「華族会館史」、一九六六年、二二六―二七頁)。
- (10) 山浦貫一「政治家よ何処へ行く」(日本書院、一九二九年)一一〇頁には、研究会の団結が強固である事の要因として子爵が貧乏である

- (25) 中川小十郎「近代日本の政局と西園寺公望」(吉川弘文館、一九八七年、四二二頁)。中川は西園寺の側近で立命館大学の創立者である。
- (26) 研究会幹部の男爵互選議員。水野直の腹心として研究会男爵部を統括していた。父は長州藩家老福原越後であり、田中とは地縁的結合があった(白面人「働き盛りの男」、やまと新聞、一九二五年、二六〇―三頁)。
- (27) 公正会幹部の男爵互選議員。公正会幹部として研究会と公正会の仲介役を果たしたが、清浦内閣末期に研究会に転出した(同右、二二―四頁)。
- (28) これに先立つ大正十年、西原は「大正維新の要諦」と題した意見書を田中に提出し、「実行内閣の必要」を田中に説いている(「田中義一関係文書」〈山口県文書館蔵〉所収)。
- (29) 水野らが田中義一擁立運動を始めたのは大正一二年二月一六日のことであったが、それが本格化するのは山本内閣の後継をめぐる運動においてである(結城温故会編「水野直子を語る」、結城温故会、一九三〇年、一四〇頁)。
- (30) 山本四郎編「西原亀三日記」大正一二年二月二八日の条に「早朝田中陸相を訪ひ、辞職決定の閣議の内容を聴取し、茲に後継内閣の組織に関する方寸を定む」とある(京都女子大学、一九八三年。以下、「西原日記」)。
- (31) 大正一三年二月二五日付「西園寺公望書簡」(前掲、「田中義一関係文書」)。
- (32) 他方、平田東助内大臣や松本剛吉など上原勇作陸軍大将を推す勢力もあったが、上原自身は二八日には清浦への大命降下を予言しており、自らの首相就任には熱心でなかった。(元帥上原勇作伝記刊行会編刊「元帥上原勇作伝」下巻、一九三七年、二〇七頁)。平田は元老の奉答

が清浦であったため、松本剛吉に「御互の陰謀は駄目であった、此は二人の責任である、君鎌倉上原勇作の迷惑ならぬよう能く話し呉れ」と言つて上原に報告させた(岡義武・林茂編「大正デモクラシー期の政治 松本剛吉政治日記」、岩波書店、一九五九年、大正一二年一月三十一日の条。以下、「松本日誌」。また、この上原擁立運動は薩派の画策といわれているが、「松本日誌」の同日の記述によれば、使者に立つた松本は牧野伸顕宮内大臣と沼津で鉢合わせ、大船で「返りに病人ありと称し」て密かに鎌倉に向かつている。このことから、牧野はこの画策に参加していなかったと考えられる。

(33) 「有松英義略歴」大正一三年一月一日の条(「有松英義関係文書」〈国立国会図書館憲政資料室蔵〉)。

(34) 同右。

(35) 前掲、「松本日誌」大正一三年一月三日の条によれば、有松は憲政会の党外員の一木喜徳郎枢密院顧問官、貴族院無所属議員の岡田良平、公正会幹部の阪谷芳郎を開僚として考えていたという。

(36) 同右、大正一三年一月二日の条。また、坂本辰之助編「子爵牧野忠篤伝」(華堂子爵伝記刊行会、一九四六年、七四頁)によれば、この会談で清浦から、皇太子の御成婚と来るべき衆議院総選挙の公正公平な執行を内閣の目的とし、組閣については選挙の公正を期するために政党によらずに研究会に一任する事が告げられたという。

(37) 水野鍊太郎「清浦内閣辞職の推過顛末」(「水野鍊太郎関係文書」〈国会図書館憲政資料室蔵〉)。水野鍊太郎は清浦内閣の内務大臣。また、二人しか生存していなかった元老のうち、松方正義は病床にあつたため、この「元老の意向」とはもう一人の元老である西園寺の意向を指している。しかし、この「意向」が西園寺自身の発言であつた事には多くの疑問が呈されている。例えば、水野鍊太郎は同著のなかで、西

園寺は純然然内閣の困難を知らない筈がないから「閣員に政黨員を入れない」というのが西園寺の意向であるかどうか疑わしい、と述べている。

(38) 井上正明編「伯爵清浦奎吾伝」下巻(同刊行会、一九三五年、二六〇頁)。

(39) 前掲、「有松英義略歴」大正一三年一月二日の条。

(40) 同右。また、大正一三年一月一日付「有松英義書簡」(上原宛て)に見られるように有松は上原とも関係が深かつたことから、田中と近い研究会幹部が敬遠したとも考えられる(同研究会編「上原勇作関係文書」、みすず書房、一九七六年、一九頁)。

(41) 前掲、「有松英義略歴」大正一三年一月二日の条。

(42) 清浦は拝辞の意向を二日夜のうちに同郷の安達謙蔵や徳富蘇峰に告白してしまつた(内海透述「政変思出草」、山川出版社、一九八一年、一六八頁)。内海は入江貫一内大臣秘書官長のペンネームである。また、拝辞の意向を伝えられた安達は有松を中心とした組閣に参加している(「時事新報」大正一三年一月三日)。

(43) 前掲、「伯爵清浦奎吾伝」、二六〇頁。

(44) この際に清浦が拝辞の意向を伝えたのか、さらに、摂政宮から優詔が下つたかどうかについては議論がある。しかし水野鍊太郎「清浦内閣成立ノ顛末」(前掲、「水野鍊太郎関係文書」所収)や「清浦内閣成立顛末」(前掲、「松本日誌」、二八八頁)などの史料を総合すると、拝辞の意向を持つて参内した清浦が、拝謁前に平田と牧野に説き伏せられて「組閣が難儀」であることだけを摂政宮に報告し、それに対して摂政宮から非公式な形で激励があつたと考えられる。

(45) この挙国内閣構想に参加した人物に政友会代議士の桜内幸雄がいた。彼の自伝「蒼天一夕談」(蒼天会、一九五二年、一一五頁)によれば、

内閣書記官長に就任した小橋一太もその構想の同志であつたという。

(46) 以上、四日の有松の動静については、前掲、西尾「清浦内閣の成立と研究会」。

(47) 前掲、「有松英義略歴」大正一三年一月四日の条。

(48) 同右。

(49) 前掲、西尾「清浦内閣の成立と研究会」。

(50) 高倉徹一編「田中義一伝記下」(同刊行会、一九五八年、三三〇頁)。

(51) 前掲、西尾「清浦内閣の成立と研究会」。

(52) 前掲「清浦内閣成立ノ顛末」(「水野鍊太郎文書」所収)。

(53) 前掲「元帥上原勇作伝」下巻、二〇七頁。

(54) 「大正一三年手帳」(「水野直閣係文書」〈国立国会図書館憲政資料室蔵〉)。

(55) 財団法人郷男爵記念会編刊「男爵郷誠之助君伝」(一九四三年、四四二頁)によると、郷誠之助に対して蔵相の就任要請があつたというが、管見の限り、郷が閣僚名簿に挙がっている事はない。

(56) 「関係の顔触」(「時事新報」大正一三年一月五日)。

(57) 前掲、「帝国議会と華族の活動」、二八二頁。

(58) 同右、二九〇頁。

(59) 「外務省の抗議 藤村男の外相に」(「時事新報」大正一三年一月六日)。

(60) 外務大臣には、松平恒雄外務次官の推薦によつて松井慶四郎元駐英大使が就任した。

(61) 「公正会捻じ込む 藤村男の位置」(「時事新報」大正一三年一月六日)。

(62) 研究会内には憲政会寄りの江木千之の入閣に対して反対があつたため、江木に入閣を辞退してもらい、ポスト不足を解消しようとする動

きもあつた(前掲、「政変思出草」、一七〇頁)。また、この大木の離脱に関しては内相候補の水野鍊太郎が難色を示している(前掲、西尾「清浦内閣の成立と研究会」)。

(63) 川辺真蔵「大乘乃政治家水野直」(水野勝邦、一九四一年、一七六頁)。

(64) この前日、上原は陸軍砲工兵学校卒業式の席で居並ぶ陸軍有力者たちに「組閣の本命は多分清浦子爵に降下するだろうが、どうせこの内閣は微力で永く続くまいから、この際は陸軍が一致して陸軍大臣を奏請するのをやめようじゃないか」と語つたという(高倉徹一編「田中義一伝記下」、原書房、一九八一年、三二九頁)。上原は、ここで自らの福田擁立の策動を邪魔されたいための布石を打つたのである。前掲、「元帥上原勇作伝」にも同様の記述があることから、真偽の疑いはないと見てよいだろう。

(65) 「メモ一 大正一三(三)年」(前掲、「上原勇作関係文書」、六六七頁)。

(66) 前掲、「田中義一伝記下」、三三三頁。

(67) 福原と田中の関係については注二六参照のこと。

(68) 前掲、「伯爵清浦奎吾伝」下、二七〇頁。

(69) 「大正一三年日記」(「阪谷芳郎関係文書」〈国立国会図書館憲政資料室蔵〉)。

(70) 有松の組閣工作に協力した江木翼は千之の養子である。

(71) 江木千之翁経歴談刊行会編「江木千之翁経歴談下」(同会、一九三三年)、四六三頁。

(72) 「信濃毎日新聞」大正一三年一月五日。

(73) 阪谷子爵記念事業会編「阪谷芳郎伝」、一九五一年。

(74) 大正一三年一月二日付「清浦奎吾書簡」(「小橋一太関係文書」〈国立国会図書館憲政資料室蔵〉)。同書簡で清浦は小橋に協力を依頼す

ると共に、研究会の協力が必要である旨を述べている。

- (75) 「組閣の陣容成って」〔時事新報〕大正一三年一月六日。
- (76) 「時代錯誤じゃ、俺は出ないよ」と清浦子は気軽に語る」〔時事新報〕大正一三年二月三日。
- (77) 前掲、「貴族院内閣の出現」。
- (78) 憲政会は五日、革新倶楽部は七日に清浦内閣反対を表明した。
- (79) 前掲、「政党史論、原敬没後」、一〇六頁。
- (80) 政友本党は一四九議席を有し、辛うじて衆議院第一党の地位にあった。
- (81) 「貴族院内閣とは迷惑至極」〔時事新報〕大正一三年一月七日。
- (82) 注三五を参照のこと。
- (83) 貴族院侯爵議員。幕末の福井藩主松平春嶽の子で、尾張徳川家を嗣ぐ。貴族院改革を推進した。林政史研究者としても知られる。
- (84) 貴族院男爵議員。後述するように、中川は大正一一年には公正会の分裂を企図して水野と親和会を結成した。この第四八議会で演説の言辞が侮辱的であるとして問題となった。
- (85) 「帝國議會貴族院議事速記録四四」(東京大学出版会、一九八二年)、三六―九頁。佐々木は、土佐藩士侯爵佐々木高行の子で、貴族院侯爵議員。貴族院改革の旗手として知られ、のち、貴族院副議長(尚友倶楽部編「佐々木行忠と貴族院改革」、芙蓉出版、一九九五年)。
- (86) 前掲、「帝國議會貴族院議事速記録四四」、五二頁。
- (87) 貴族院改革についての研究としては西尾「明治、大正期の貴族院改革をめぐる諸論議」(早稲田大学社会科学研究所編刊「社会科学討究」一〇六号、一九九〇年)がある。
- (88) 貴族院への攻撃はこの後も止まず、三年後には貴族院廃止を主張した野間五造「立法二元論」(白楊社、一九二六年)が出版されるなど、

(国立国会図書館憲政資料室蔵)。

- (100) 同右、大正一三年一月二八日の条。
- (101) 前掲、「働き盛りの男」、三五五頁。
- (102) 御成婚の式典の間、議会は休会となっていた(前掲、「帝國議會と華族の活動」)。
- (103) 矢野は阪谷の腹心的な存在であった(前掲、「働き盛りの男」、二二頁)。
- (104) 原内閣以降、研究会に対抗すべく、幸倶楽部に本部を置いて協力関係にあった茶話会、公正会、同成会、第二次無所属の総称(前掲、「国史大辞典」)。
- (105) 前掲、「阪谷芳郎日記」大正一三年一月二九日の条。
- (106) 同右、大正一三年一月三〇日の条。
- (107) 注九八を参照のこと。
- (108) また、研究会内からも副島道正伯爵が研究会幹部批判を行った(前掲、西尾「帝國議會と華族の活動」三〇四頁)。副島は牧野宮相に、研究会は不謹慎であるから何とか反省するように考慮していただきたい、と依頼するなど、各方面に対し研究会幹部批判を行っていたことが窺える(牧野伸顕「牧野伸顕日記」大正一三年一月一七日の条、中央公論社、一九九〇年、一一〇頁)。
- (109) 「研究明答を避く三派有志の詰問」〔時事新報〕大正一三年一月二六日。
- (110) 「研究会の声明」〔時事新報〕大正一三年一月二八日。
- (111) 「渡辺千冬論」(前掲、「現代人物評論」、二八九頁)。
- (112) 前掲、「研究明答を避く三派有志の詰問」〔時事新報〕大正一三年一月二六日。
- (113) 「不法の行為」〔時事新報〕大正一三年一月二三日。

この危惧は現実味を帯びたものとなった。

- (89) 前掲、「西原日記」三五六頁にも「宮中府中混同の恐れ」「清浦内閣が階級闘争の道具にされる恐れ」との記述があり、この認識が広く持たれていたが窺われる。
- (90) 「後継は誰か 公正会の所見」〔時事新報〕大正一二年二月三日。
- (91) 「現閣と貴族院」〔時事新報〕大正一三年一月十日。
- (92) 「公正会幹事会」〔時事新報〕大正一三年一月八日。
- (93) 「藤村男の入閣に関せず 公正の態度を持す」〔時事新報〕大正一三年一月二日。
- (94) 「協同尚友妥協成る 藤村男入閣を機として」〔時事新報〕大正一三年一月九日。
- (95) 前掲、「帝國議會貴族院議事速記録四四」、二八、九頁。
- (96) 「研究会幹部から中川男に取り消し要求」〔時事新報〕大正一三年一月三日。
- (97) 「連日の護憲三派の詰問」〔時事新報〕大正一三年一月二日。
- (98) 前掲、「西原日記」大正一三年一月二五日の条。「清浦吉吾氏談話」(渋沢青洲記念財団龍門社編刊「渋沢栄一伝記資料 別刊第八 談話」(四・余録)、一九六九年、三四二頁)。皇太子御成婚の終了を目処として辞任を勧告した渋沢に対して、清浦はまだ職務があることを理由にこれを断った。前掲、「清浦内閣辞職推進願末」の記述から考えても、その職務が衆議院総選挙の公正な実行にあることは明らかである。
- (99) 「阪谷芳郎日記」大正一三年一月二五日の条(「阪谷芳郎関係文書」)。

- (114) この選挙において政友本党は小橋書記官長を窓口として研究会幹部の大木遠吉と協力して候補選考と選挙戦を遂行した(大正一三年二月七日付「大木遠吉書簡」、前掲「小橋一太関係文書」)。大木は邸宅を売却して選挙資金を捻出するなど、政友本党勝利のために努力を惜しまなかった(伊藤正「大木遠吉伯」、文録社、一九二六年、二二五頁)。
- (115) 前掲、「清浦内閣辞職の推進願末」。
- (116) 選挙前の議席数は政友本党一四九、政友会一一九、憲政会一〇三、革新倶楽部四三であったのに対し、改選後は憲政会一四六、政友本党一一二、政友会一〇一、革新倶楽部三〇という結果であった(衆議院・参議院編「議會制度百年史 院内会派編 衆議院の部」、一九九〇年、二九六、七頁)。
- (117) 以上、清浦の辞職に関しては、前掲、「清浦内閣成立願末」。
- (118) 松本は田中への書簡の中で「更始一新」を掲げ、護憲三派の弱体ぶりでは「更始一新」は叶わないと説いた。そして、既存政党の党利党略路線への不信任を顕にし、レーニンの先生とムッソリーニの政治を例に挙げて、強力な指導による内閣の必要を説いた(松本剛吉書簡、前掲「田中義一関係文書」)。
- (119) 前掲、「大正一三年手帳」のメモ欄「五一八」の項(「水野直関係文書」)。
- (120) 同右。この憲政会は旧薩摩派、政友会、革新倶楽部は旧長州間という図式については説明が必要であろう。実際に権立運動の参加者を見ても閣僚案を見ても、とりわけ長州間によって組織されている様子は見られない。また、床次に至っては薩摩出身である。しかし、水野の手帳にはこの図式が明記されており、彼はそのように理解していたようである。

- (121) 以下、同右、「五一〇」の項。

(122) 第一章を参照のこと。

(123) 貴族院内の一会派。同会は、大正二年七月には中川の離脱を契機に研究会に吸収される(前掲、「貴族院の政治団体と会派」一二三頁)。よって、この段階では「研究会男爵部」というのが正確とも思われるが、混乱を来さないため親和会のままとする。

(124) 前掲、「貴族院の政治団体と会派」、二二〇頁。

(125) 前掲、「大正一三年日記」大正一三年五月二二、二六、三一日の条。〔阪谷芳郎関係文書〕。

(126) 前掲、「大正一三年手帳」(「水野直関係文書」)。

(127) 第一章を参照のこと。

(128) 以下、前掲、「大正一三年手帳」、「五一二七」の項(「水野直関係文書」)。

(129) 後藤は西園寺に対して既成政党を非難する意見書を提出し、政友会と政友本党を早期に合同させて「実行内閣」をつくる必要を説いていた(「清浦内閣擁護、護憲論、政党論」、「後藤新平文書」)。このことから、後藤を総裁格として迎える事には西園寺の意向があったことが推測される。

(130) 以下、前掲、「大正一三年手帳」、「五一二七」の項(「水野直関係文書」)。

(131) しかし、一方で後藤への新党参加交渉は不調に終わった。但し、後藤の日記にはこれ以降も水野・池田との会見が見られることから、引き出し失敗後も交渉が重ねられていたようである(「大正一三年日記」六月三日の条。前掲「後藤新平関係文書」R七五―一六)。

西洋文明と日本の価値観の邂逅

——キリスト教徒内ヶ崎作三郎の明治天皇崩御観——

渡 辺 勝 幸

(玉井研究会四年)

- 一 はじめに
- 二 キリスト教徒内ヶ崎作三郎
- 三 ユニテリアン派と「六合雑誌」
- 四 「六合雑誌」に見る明治天皇崩御
- 五 「六合雑誌」に見る乃木大将殉死
- 六 「近代人の信仰」に見る内ヶ崎の思想
- 七 結 語

一 はじめに

明治維新後の日本における最重要課題は、欧米列強に伍していくために近代化を図ることにあった。近代化とはすなわち西洋文明の

吸収であり、明治政府は鹿鳴館に見られるような極端な欧化政策を進めていった。一方、かかる無分別な西洋化は国粹主義者を刺激し、日本の価値観を強く主張する者の登場を促していた。このように異文化である西洋文明の受容に際し、日本人は種々の反応を示した。本稿も、かかる日本人の反応の一事例として、明治天皇崩御時において一人のキリスト教徒がいかなる反応を示したかを考察する。

明治天皇は、明治四十五(一九二二)年七月三十日に崩御した。近代日本の統率者であったその死は大きな時代の転換点であった。さらに天皇崩御を受けて挙行された大喪の礼を待って、陸軍大将乃木希典夫妻が殉死を遂げた。乃木夫妻の極めて日本的な行為は多くの国民に影響を与え、論議を巻き起こすにいたる。

本稿の目的は、明治天皇崩御から乃木大将殉死という一連の出来事に対しキリスト教ユニテリアン派の機関誌「六合雑誌」¹⁾がいかな

る主張をし、同誌の主筆であった内ヶ崎作三郎が、これら日本的価値観が表出された出来事をもどのように捉えたかを考察することにある。この考察は、二つの相反する概念、西洋文明のキリスト教と日本の伝統的価値観の邂逅に際して、内ヶ崎をはじめとするキリスト教徒ユニテリアン派の人々がこれをいかに解釈していったか、すなわち我が国における異文化受容の一形態を明らかにする作業でもある。

因みに、「六合雜誌」は該時期に限らず、教会機関誌という範疇を越え論壇で活躍する知識人の寄稿が見られるという性格を持っていた。⁽³⁾このことから「六合雜誌」は一部のキリスト教徒に限定されない読者層を持っていたと見る事ができよう。「六合雜誌」に関する研究は幾つか存在し、内ヶ崎と「六合雜誌」の関係を宗教・芸術を中心とした研究も存在する。⁽⁴⁾しかしながら、明治天皇崩御時に視点を定め、内ヶ崎を中心とする「六合雜誌」の動きを追った研究は、管見の及ぶ限り存在しない。また、内ヶ崎の著作に関する研究も同様である。

二 キリスト教徒内ヶ崎作三郎

明治天皇崩御時に「六合雜誌」の主筆であった内ヶ崎作三郎⁽⁵⁾とはいかなる人物であったのか、その生涯と交友関係を分析することによって、内ヶ崎の精神的基盤がいかにして形成されたかを検討したい。

仙台市の北一番丁教会で洗礼を受けた。以上のように仙台における内ヶ崎はバイブル・クラスに出席することによりその生涯を規定するキリスト教と出会うことになり、さらに刎頸の交わりとなる友人を多く得ることになった。この二点は内ヶ崎の後年の活動に大きな影響を与えることになる。

明治三十一年九月、内ヶ崎は東京帝国大学文科大学に入学し英文学を専攻、三年間講師小泉八雲の教えを受けた。帝大入学と同時に中央学生基督教青年会の会館寄宿舎に入り、明治三十三年九月になると吉野作造・小山東助も帝国大学に入学し同じ寄宿舎に入るようになる。三人はこの寄宿舎で青春時代を謳歌した。吉野は小山の死に際し、大学に入って間もない頃内ヶ崎と小山の三人で寄宿舎において議論をしたことを回想し、以下のように述べている。「内ヶ崎君は頻りに英国に於けるスコットランドの使命を説き、国家の精神的開発は、どうしても東北の人間が之を掌らなければならぬと大氣焔を吐いた。それにつひ釣り込まれて、といふと如何にも不真面目のやうであるが、其の当時三人は少くとも真面目であつたと記憶して居る。然らば我々三人が東北精神を代表して、日本の精神的開発の爲めに一身を捧げようといふやうなことを話合つたことがある。」

明治時代の東北地方出身者には内ヶ崎や吉野のみならずキリスト教徒が多く見られる。とりわけ仙台には多くのキリスト教系学校が創立され、多くの宣教師が来日した。内ヶ崎は吉野、小山との議論の中で東北地方を英国のスコットランドになぞらえ、東北出身者は経済力は及ばないが日本の精神文明の原動力となるべきだと主張し

内ヶ崎の活動歴を俯瞰してみると大きく五つに分けることができると思われる。それは(一)故郷仙台時代、(二)東京帝国大学在学中からオクスフォード留学中まで、キリスト教本郷教会の機関誌「新人」に多くの文章を投稿した時代、(三)帰国後「六合雜誌」の主筆を務めた時代、(四)「六合雜誌」廃刊後、政界に入るまで多く寄稿した「中央公論」時代、(五)衆議院議員当選後の政界時代である。以下時代を追って概観してみたい。⁽⁶⁾

内ヶ崎は明治十(一八七七)年四月八日、宮城県黒川郡富谷村に生まれた。旧制二高に入学した内ヶ崎は島地雷夢⁽⁷⁾、栗原基らと同級になり、土井晩翠を先輩に持った。明治二十八年秋頃になると、栗原の勧めにより尚綱女学校教師ミス・ブゼルのバイブル・クラスに出席し始める。このバイブル・クラスにしばらくして吉野作造、小山東助らが出席するようになったことは重要である。それはこの二人が内ヶ崎にとってかけがえのない友人となったためであり、彼らは内ヶ崎に対して非常に大きな影響を与えた人物であったからである。後年、内ヶ崎は小山の死に際し、「私は明治十年生、吉野君は十一年生、小山君は十二年生でありまして、吾々は三人何か特別の関係を有つて居るやうに考へられて居りますが、小山君は海の人、吉野君は平原の人であります。私は山の人であります。」と述べた後に吉野、小山が内ヶ崎にとって同郷の誼以上の関係であったことが示されている。

内ヶ崎は旧制二高在学中、三年間校友会雑誌「尚志会雑誌」の編集委員を務め、さらに卒業直前になって島地雷夢・吉野作造と共に、

たのである。

その議論において彼らは「我々三人が東北精神を代表して、日本の精神的開発の爲めに一身を捧げようといふやうなことを話合つた」とする。この吉野の回想からも、内ヶ崎の精神的基盤は吉野及び小山との交流関係から生れたものであるということが窺える。さらに吉野は「唯だ其の当時話合つた志だけは、兎も角も今日まで共に貫いて居る積りである。」と述べ、当時の三人の交流は、吉野においても大きな影響として心に残っていたようである。

また内ヶ崎は、明治三十三年に初めて「新人」に寄稿するようになり、大学院に進み早稲田大学の専任講師となる傍ら、明治三十七年には「新人」編集員の一人として奮闘することにもなった。

内ヶ崎の人生における一つの転機となったのは、明治四十一年から明治四十四年までの留学である。彼は英国オックスフォード大学マンチェスター学院に宗教研究のために留学するが、留学先からも「新人」や「早稲田学報」に投稿を続け精力的な活動を誌面で展開していた。ここで内ヶ崎は「日本では是れまでのやうな間に合はせぬ人物をのみ作つた日にはいくら実業が盛大になつても結局民族の大損失に候」と述べ、英国と比較し日本の教育が未だ途上の段階にあるということを書き記している。

内ヶ崎にとって英国留学の影響は非常に大きいと思われる。それはこの時期以後の評論を概観すると、日本について述べる際に殆どといっていいほど英国との比較において筆を進めているためである。さらに言えば内ヶ崎における英国の評価はほとんどが賞賛であり、

日本の有るべき姿は英国にあるという主張がしばしば散見される。例えば、英国の労働者に対する視点である。内ヶ崎は留学中、英国における労働者の見識が非常に高いものであり日本と比較して労働者層の中にインテリ層が存在する割合が高く、労働者にも関わらず日本のことについて自分よりも詳しく知っていることに驚きを示している。かかる経験は内ヶ崎に英国の評価だけではなく、労働運動への目覚めも与えたということが言えよう。内ヶ崎が政治に目覚めるときつかけもあるいはこの時期だったのかもしれない。

明治四十四年六月、内ヶ崎は早稲田大学教授に就任し、帰国後は東京三田の統一基督教会の牧師に就任した。『六合雑誌』の主筆としてこの頃より大正十年の廃刊まで再び精力的に執筆活動をするようになったのである。「宗教家内ヶ崎作三郎」の全盛時代といえよう。

また内ヶ崎は「自分がやったことは、宗教と教育である」と述べているが、彼は日本にキリスト教を根付かせるためには、日本古来の祖先記念の風習をうまく取り入れる必要があり、キリスト教徒も祖先を敬うという精神を理解しなければならぬと述べた。ここにおいて西洋文明と日本文化との接木は既に行われていたと言える。内ヶ崎は、キリスト教徒の中に「祖先崇拜は全然基督教の勢力を専らにする欧米各国民の間に存在せざるを主張」する者がいるが、それは誤りであり「祖先記念の風は厳然と存在す」と指摘する。なかでも、祖先が栽培した樹木を保存するイギリスの風習は日本よりも優っていると述べ、「口に祖先崇拜を唱ふる我國に於ては祖先の紀

議員選挙に憲政会より立候補し、初当選を果たした。ここに「政治家内ヶ崎作三郎」が始まる。執筆活動も政党の機関誌に移行し政治評論がしばしば見られるようになる。以後、昭和戦前期、議会の有力政党で憲政会の後身ともいえる民政党に所属し当選を重ねその幹部となり、政党解散後は大政翼賛会に入会し、昭和十六年十二月、衆議院副議長に選出され、終戦まで副議長を務めた。そして昭和二十二年二月、東京に於いて死去した。

以上のように、内ヶ崎作三郎は青春時代に仙台でキリスト教の洗礼を受けたことからその生涯を布教と教育に捧げた。また、ともにキリスト教徒であった政治学者吉野作造や政治家小山東助の影響もあって、形而上の宗教世界にとどまらず現実の政治世界にも関心を抱いた人物であったということが出来る。このことは、内ヶ崎が明治天皇崩御および乃木大将殉死に際しこれを積極的に取り上げる姿勢を示すとともに、キリスト教の原理にとらわれない視点と解釈を施していたことと少なからぬ関係があると思われる。

三二 ユニテリアン派と『六合雑誌』

前章では内ヶ崎の生涯を追いながら、彼のキリスト教観が日本の伝統的文化との融合を考慮するものであったことを明らかにしたが、こうした彼の姿勢がキリスト教原理主義の立場からは必ずしも認容できるものではなかったであろうことが推測できる。本章においては、内ヶ崎がかかるキリスト教観を抱いた背景として、内ヶ崎の属

念物を重んぜざる場合多くして、黙して之を行ふ英国に於て反対の現象をみるは面白い対照ではないか。」としている。祖先を崇拜するという行為は万国共通の価値観であり、東洋独特の行為であるからといって否定するようなことはなかったのである。内ヶ崎自身も示唆しているように、キリスト教徒の中には祖先崇拜をして偶像崇拜に繋がるものであり、神の教えに背くと考える者がいたことに鑑みると、キリスト教徒である彼が祖先崇拜を正面に掲げ、これを独自の解釈を加えながら全面的に肯定していることは注目に値しよう。しかも、その祖先崇拜は、一般論として語られているのではなく、より具体的に日本的なものであった。すなわち、この論説の中で内ヶ崎は「我國は靖国神社と招魂社とを以て誇る。殉国の戦士を記念するは至当なることである。然れども欧米に於てこの風全くなきに非ず。」と述べ、アメリカにおいて戦死者の墓に詣でる花飾の日に

ついて紹介し、「天眞の情を流露する点」において日本の招魂社と同様のものであると明言している。このように内ヶ崎は自らキリスト教徒であるにもかかわらず、招魂社に理解を示すだけではなく、神社は宗教機関ではないとの解釈を示しながら、日本の文化を積極的に肯定していったのである。そこにはキリスト教と日本文化との軋轢の痕跡は窺われない。彼は、原理にとらわれたキリスト教ではなく、日本の風土に融合するキリスト教解釈を施しながらこれを受け容れていたのである。

内ヶ崎は『六合雑誌』廃刊後は、『中央公論』を中心として宗教、教育のみならず政治も論じ、大正十三年五月には、第十五回衆議院

していたキリスト教のユニテリアン派がいかなるものであったのかを検討したい。

まずユニテリアンが我が国に紹介されたのは、明治二十年五月に矢野文雄が郵便報知新聞において「ユニテリアン教の要領」の中でイギリスのユニテリアン教徒の信仰を明らかにしたことに始まるといわれる。矢野は英国ユニテリアン協会から、同紙に送られてきた「ユニテリアン耶穌教徒に関する教義の公布書」をもとにユニテリアニズムを紹介している。その内容は、ユニテリアン教徒はイエス・キリストを神とする三位一体説をとらないこと、人間は生まれながらにして腐敗しているとは見ない、また善行をなす力を持たない存在であるとはしないこと、聖書の一字一句全てが天の詞であるとはしないことなどである。このことからわかるように、ユニテリアニズムはキリスト教の中でも聖書にとらわれない柔軟な姿勢を持った宗教であるといえる。また矢野は慶應義塾出身であり、明治二十年アメリカのユニテリアン協会宣教師ナップの来日には福沢諭吉が関与していることが明らかになっている。ナップは同年十二月二十一日に来日したが、十月の段階で福沢はアメリカ留学中の息子一太郎にナップと会談するよう申し付けている。さらに福沢は明治二十一年一月にナップ夫妻を自宅に招き晩餐会を催したり、慶應系の団体交詢社で講演させたりし、明治二十三年にナップが帰国するまで交友を保った。宗教に関してどちらかといえば冷淡であったといわれる福沢がユニテリアン宣教師に便宜を図ったという事実は、ユニテリアニズムが福沢の受容しうるものであったということの証左であ

らう。

明治二十三年三月、ユニテリアン協会の機関誌として『ゆにてりあん』が創刊された。その後雑誌名は「宗教」に変わり、仏教徒もユニテリアン協会に参加するようになるなど、キリスト教色が希薄化した。次第に宗教研究の機関となつていつたユニテリアン協会は、安部磯雄を中心に日本の社会主義運動の拠点となる活動を行うようになり、明治三十一年からは「六合雑誌」を「宗教」と合併させて論壇にも影響を与えるようになった。かくして「六合雑誌」は明治四十五年の段階において、前年牧師兼編集者となつた内ヶ崎を中心としてユニテリアニズムの布教と同時に論壇にも影響を与える「文芸宗教雑誌」となったのである。

また大正元年における統一教会(ユニテリアン派)の広告を見ると、多くの偉人がユニテリアンだつたということが紹介され、ユニテリアンは「迷信でない新しい宗教」であると宣伝している。また、「六合雑誌」の誌面中に掲げられた「東京ユニテリアン教会綱領」によれば、その第三に「吾人は他の宗教の裡にも亦真理を含有することを承認し寛容の精神を以て之れに對せんことを期す」とあり、他宗派にも寛容な態度をとることをその目標として掲げている。以上のことから鑑みるに、ユニテリアン派の特徴として「寛容性」ということも挙げられるだろう。

このように現実的な教義、宗教に冷淡であつた福沢が認めたこと、他宗派への寛容性の強調などからも分かるように、ユニテリアンは「正統派」キリスト教とは異なる姿勢をとつていたことが窺われる。

現実の人間社会で生活をしてきた「大人格」者として理解されていくのである。

内ヶ崎における信仰の告白から、彼にとつてのユニテリアンがいかなるものかを読み取れよう。それは第一に、聖書は「詩的」な言葉であつて、文字通りに読み取るような解釈はしないということである。第二に、イエスの存在は神憑りのものではなく、人格の優れた「歴史的人物」であつたことを日露戦争になぞらえながら示している。こうした事実は、内ヶ崎が宗教の世界にとどまらず広く世俗の現実社会に目を向け、キリスト教原理にとらわれないことのない宗教家であつたことを窺わせている。

四 「六合雑誌」に見る明治天皇崩御

前章までの考察により、内ヶ崎作三郎を中心とするキリスト教ユニテリアン派の実態を明らかにした。本章においては、明治天皇崩御に対する「六合雑誌」の反応がいかなるものであつたかを明らかにしてみたい。

明治四十五年七月三十日、明治天皇が崩御した。内ヶ崎は八月中、郷里の宮城に帰郷する予定であつたが、「図らずも先帝陛下の御崩御の事がありましたので、滞郷旬日の後すぐさま東京に引きかへし、毎日曜統一教会の教壇に立つて、諒闇に籠れる国民の自覚を促されつ、あつたという。彼は崩御直後に発行された「六合雑誌」三八〇号の口絵解題の中で、バリの東部墓地にある、バルトロメーによ

それでは、内ヶ崎自身はユニテリアンをどのように見ていたのだろうか。彼はオクスフォード留学から帰国後、まもなく統一基督教の牧師となる。ここで明治四十四年九月、彼はキリスト教に関する信仰を告白する説教を行った。まず彼は、キリスト教の中心思想は「神に対する吾等の信念と態度」であると述べた。さらに神とは何ぞやという問いに對しては、「實際私は不完全なる言語を以て神を説明することが出来ない。説明することが出来ないからして神である。」と禪問答の如き説教をしている。さらに、有神論の根拠がどこにあるかという問いに對しては「それは人間の意識の中にあると答へたい」と、あくまで主体を人間に置いて示している。また創世紀の「最初に神天地を造り給へり」という表現に對しては、「それは詩的の言葉であ」と述べており、このことから内ヶ崎がキリスト教の原理にとらわれない、すなわち聖書の言葉を文字通りに解釈することはしない宗教観を持つてることがうかがえる。内ヶ崎のイエス観もまた、この説教中において明らかにされている。内ヶ崎は、イエスによる伝導の区域と年月は極めて微少であつたものの、彼の教訓は「人生胸奥の最深の事実に触れた」ものであつたとした上で、これを日露戦争における旅順口背後の二〇三高地の戦いになぞらえている。すなわち、二〇三高地という平凡な丘陵の戦いが日露戦争の終局に大きな影響を及ぼしたように、キリスト教会は「この「渡辺注」イエスの」大人格の感化によつて成立し、後世の教会改革者はその生命の源泉を常にこの大人格に求めた」のであつたという。内ヶ崎においてイエスは「超自然的人間」ではなく、

「死せる人々の碑」を「最大の芸術品」であり、「死によりて再会の機会を興へられたる一族の静黙なる歡喜を示す」ものとしたうえで、明治天皇崩御について以下のように言及する。すなわち、「二天万乗の君も死の手を免れ給ふこと能はず、諒闇中の国民は悲哀し又慟哭す。吾人は恐怖を以て或は希望を以てこの教訓を受けつつありや。千八百九十四年より四星霜の刻苦を経たるバルトロメーの大芸術は目下の吾人に何等かの光明を興ふことを信ぜんとす」としている。内ヶ崎は「二天万乗の君」でさえも死は免れ得ないがその業績は時代を超えて永遠である旨を示唆し、彼の明治天皇に對する少なからぬ敬意を窺わしていた。

さらに三八〇号の冒頭を飾る論文として、内ヶ崎は「天佑の明治日本」という論説を記した。このなかで彼は、明治天皇に言及する前に江戸時代および幕末、明治時代がどのような時代であつたかを明らかにした上で、明治時代においては列強の圧迫が日に日に甚だしく挙国一致の体制が必要な時代であつたと述べる。さらに彼は明治時代について以下のように考察している。

「大行天皇の治下に日本民族が盡し得たる開国進取の努力、及び國運の發展は、未だ世界の史上に比類なき大現象である。今、國を挙げて諒闇の裡に在るの日、殊に先帝の鴻業を追懐し奉り、偉大なる先皇の帝徳と、多望なる日東帝國の使命とを想ふは臣子の情である。而して吾等が過古四十五年の帝國の發展を懐ふ時、吾等はそこに何物とも知れず、靈妙なる天地神明の加護を想起せざるを得ない。」右の論からは、内ヶ崎が明治という一つの時代を世界史上稀に見

る発展を遂げた時代であると見做した上で、その時代の中で明治天皇を「偉大なる」存在と位置付け、その発展も天皇の「鴻業」によるところ大であると考えていたことがわかる。したがって、内ヶ崎は明治天皇治下の鴻業をあげ、「憲法の発布、ことに信教の自由を國民に與へ給ひたる、帝國議會の開設、日清日露二大戦争の勝利等いづれか日本民にとつて天佑豊かなり証左ではなかつたか」とする。

また、この主張の中で言及されているように、明治天皇の治世には大日本帝國憲法の制定や議會の開設、日清日露の勝利だけでなく、信教の自由が与えられたことも世界に誇るべきこととしてしている。江戸幕府による禁教政策が長く続き、キリスト教徒が社会から排除されていたことを鑑みれば、キリスト教徒である内ヶ崎がかかる考えを持つことに不思議はないであろう。さらに内ヶ崎は明治天皇の帝徳を「吾等は最後に明治天皇の帝徳を讃へなければならぬ。皇祖皇宗の御遺徳の加護もさることながら、天資英邁に座せられし先帝が、常に嚴然の裡、功臣をして充分自己の材能を發揮せしめ給ひし御徳のほど、全世界帝王多しと雖ども、明治天皇に比すべき帝王のありとも思はれぬのである」と称えた。

このように彼は明治天皇を世界に比類なき帝王であると、最大限の讃辞を与えていたのである。皇室における儀式はいわゆる神道形式であり、異教徒である内ヶ崎が明治天皇を最大限の讃辞をもつてたたえることに矛盾を感じなかつたのだろうかという疑問が湧く。しかし、少なくとも内ヶ崎のかかる反応を見る限り、キリスト教徒

以上のように、内ヶ崎は明治天皇崩御に際し「六合雜誌」上で明治天皇の帝徳を称え、「大和民族」は「精神的新日本」を建設しなければならぬとまで主張した。また彼は明治天皇に積極的な評価を与えているが、それは「臣子の情」であり、かかる偉大な皇帝を戴いた大和民族は「天佑」であると表し、キリスト教徒としての精神的葛藤の痕跡を窺うことはできない。

また三八〇号に於ける明治天皇関連記事は、内ヶ崎以外の論者によるものも存在するが、その中に批判的に捉えたものは存在しない。むしろ内ヶ崎周辺の人々（キリスト教徒や労働運動家を中心）が明治天皇崩御を受けて、大きな時代の転換点が訪れていると強く感じたであろうことは想像に難くないところである。

五 「六合雜誌」に見る乃木大将殉死

前章においては、内ヶ崎作三郎が明治天皇崩御に際しその業績を積極的に讃美したことを明らかにした。しかしながら、明治天皇崩御に対する記事が「六合雜誌」三八〇号の中心テーマとなっていたわけではない。これに対し、その後起こった乃木大将殉死事件、すなわち大正元年九月十三日、明治天皇大喪の礼を待って陸軍大将乃木希典が殉死したことに対する「六合雜誌」の反応は、特集と呼ぶにふさわしいほどの取り上げ方であった。本章においては、この極めて日本的な行為である「殉死」事件に関して「六合雜誌」がいかなる反応を示したか、さらにはそこから窺われる内ヶ崎の編集意図

としての属性よりも日本人としての属性が優越していたと見ることでできるだろう。続けて、内ヶ崎は来るべき大正時代のビジョンを示す。すなわち、「先帝の御心を懐ひ奉る時、天佑豊かなりし明治日本を回顧する時、吾人は無限なる神の恩寵が過古に於て大和民族の上に加はりし事を見、来るべき大正の日本に於て、その恩寵が更に大なるべきことを信じ。益々向上して精神的新日本を建設せなければならぬ。これ天佑に謝すべき大和民族の大なる責任である」としている。

以上のような表現から分かるように、内ヶ崎は「大和民族」という言葉を殊更用いながらその誇りを強く抱くと同時に、新時代において「精神的新日本」を建設すべきことを説いている。また文章全体を通じ、内ヶ崎自身の「宗教的直覚」から判断して、明治天皇を戴いた明治の我が国は「天佑」であつたとの主張が展開されていたのである。

また、「六合雜誌」上においては、「天佑の明治日本」に続いて、明治天皇御製の和歌が紹介されているが、これもまた明治天皇によって日露戦争中に詠まれた歌がルーズベルト大統領の感動を呼び、日露仲裁談判を生ぜしめたという「帝徳」の賞賛を表しているものである。また同誌の上では、日本基督教教会同盟会による明治天皇への弔詞、明治神宮建設協議会の概要なども掲載された。前者は「臣等」が信教の自由を享けたことに感謝する旨の弔詞であり、後者は明治神宮の建設地、予算など八項目にわたる覚書が決定された事実を報じるものであつたが、そのことに対する批判は見られない。

を考察してみたい。

まず、乃木大将殉死に関し「六合雜誌」はコラムの形で、その死を解釈するにつき「二個の面白きコントラスト」があると述べている。官僚派は「単に大将の純忠至誠に基く殉死なり」とし、非官僚派は「殉死に加ふるに憤死なり」としているとする。続けてコラムは「いづれにもあれ、偉人の死をして空しうせしめざらんは、生き残れる國民の重大な責任である。」とする。ここでは官僚派の主張および非官僚派の主張を紹介しているが、いずれも乃木大将の殉死そのものを批判するニュアンスは描かれていない。

さらに「六合雜誌」の中心メンバーである三並良は「唯だ大将の精神に同情したい」とし、また加藤は「近頃、日本の思想界に於て、乃木大将の死程、深刻な感動を、与えたものはまたとあるまい。軍人嫌いの余でさへ近頃ない感動を覚えた」と述べた上で、「余は大将の死によつて、頑迷なるキリスト信者の自殺絶対非認論の覆らんことを希望する。また、殉死の古風を笑ふ軽薄なる心に、火のバプテスマの下らんことを願ふ。」としている。さらに中野柏葉は「キリスト教では自殺を絶対的に排斥するのだと云ふ論者がある。果してさうであらうか。僕は之を知らぬ。」とする。

以上のことから「六合雜誌」においては、本来自殺を認めないはずのキリスト教徒が日本的な価値観に基く乃木大将の行為を積極的に評価するとともに、自殺絶対非認論に立つキリスト教徒を「頑迷なる基督信者」という言葉まで用い、批判していることがわかる。

乃木大将の殉死を積極的に評価する論は、「六合雜誌」三八二号

にも続く。加藤玄智は内ヶ崎に依頼されて仏教の生死観について論じ、釈迦は「精神上の不死を求めんければならぬと云ふことを大悟徹底されたのである。」とし、「私利私欲のきたない念慮を断つた状態」こそが釈迦の悟りとした。加藤は乃木に関連した言及をしてはいないが、「肉体的物質的の不死以上に、もつと大なる不死のあると云ふことを知らなければならぬ」とし、乃木の殉死への肯定的評価を暗示させていた。

また高木大尉は自殺そのものには賛成しないが「我々は將軍の死を以て武士道の最後を飾れるものとなし、深く其の心事に同情し、謹んで之に敬意を払う」とし、乃木の殉死を「武士道」の精神の発露と見做し肯定していた。「六合雜誌」の三八二号においては他にも世界の自殺観について考察を加えた論文が幾つか散見された。これらは、乃木大尉の殉死に直接評価を与えるものではなく、自殺という行為は明治日本に限らず、時空を越えて存し、それをめぐり様々な自殺論が存在したことを紹介するものである。この内ヶ崎の編集意図は、宗教的論点となる自殺をテーマとする際、乃木大尉の殉死と西洋における自殺を比較考量し、いくつかの生死観を提示しそれを読者に考えさせようということにあったのではないだろうか。しかし、様々な生死観をめぐる議論の中に乃木大尉殉死を批判するものは見当たらなかった。

以上のことから、「六合雜誌」上における多くの論者の主張は以下のようにまとめることができる。まず、自殺を肯定することはしない。しかしながら、西洋キリスト教徒が主張するように自殺を絶

対否定することはない。そこには、日本人の行動は日本人が解釈を行うべきとの思考が存在し、乃木大尉の殉死のような場合は日本的な「自殺」であるとして、論者のほとんどが乃木大尉殉死に同情的な評価を与えている。そして、こうした彼らの論説は内ヶ崎の編集意図に沿ったものであるとも言えよう。既述したように、内ヶ崎は精神的な文化を重視していた。内ヶ崎の直接的な記述は見られないものの、乃木大尉殉死事件が彼の心の琴線に触れたことは想像に難くない。

ところで、乃木大尉殉死を積極的に捉える論者のなかでも永井柳太郎の見解は注目に値する。まず彼によれば、「日本では恰も乃木將軍の自殺があつて、殆ど國民を挙げて無差別に自殺そのものを文明的行為であるかの如く賞賛し、それがために思慮なき輩を誤ること少からざるを憾とするのであるが故に、自殺に対する研究の必要は今日吾々をして一層痛切に感ぜしむるのである」とし、自殺を無条件に肯定することの危険に警告を發しつつも、自殺を「積極的自殺」と「消極的自殺」に区分し、次のように論じる。すなわち、永井は「積極的自殺」を「自己の最高の理想とする所に殉ずる自殺」と定義し、この種の自殺は決して咎めるべきではないとしている。乃木大尉の死、タイタニック号船客の男性的死もこの意味における一種の自殺であるとしている。他方、「消極的自殺」は「退いて自己の苦痛を免れやうとすることに外ならぬ」として「人間の行為の中でも最も卑怯な方法である」としている。永井は二つの自殺を解説した上で、西洋人が自殺を絶対的な罪悪であるかのごとく考えた

のは「非常な独断である」とし、「吾々は何時たりとも自己の最高理想の道德的要求の爲めには自殺もし、復た自ら進んで人に殺されるにも行くといふ決心がなければならぬ」とした。永井の表現から判断して、彼もまた「積極的自殺」である乃木將軍の殉死を評価すべきものとしていることが窺えるだろう。

しかしながら、全てのキリスト教徒が「六合雜誌」に見るような反応を示したわけではない。例えば、当時のキリスト教界の指導者と目されていた井深穉之助は日記において以下のように記して乃木大尉殉死を批判的にとらえていた。

九月十三日においては、「(略)「大喪式出席の」帰途墓地ニテ号外荒ニ逢フ。買ツテ見レバ乃木大尉夫婦ノ自刃ナリ。実ニ意外千万悲惨ノ極ナレトモ実ニ困ツタ事ナリ。大ナル心得違ナリ。其ノ不健全ナル思想ノ現表ナリ。」とし、乃木大尉殉死に不快感を表していた。さらに九月十七日には、「講堂ニ於テ乃木大尉殉死ニ付講話ヲナス。キリスト教倫理ノ立場ヨリ判断スレバソノ非ナルコト勿論ナレトモ真ノ武士道ヨリ見テモ心得違ト云フベキナリ。殉死ノ弊ヲ今更論ズルマデモナシ。」と記している。井深は、「六合雜誌」上における多くの論者から見れば「頑迷なるキリスト信者」ということにならう。また、かかる事実は「六合雜誌」が、既存の教義を厳格に守るキリスト教徒とは一線を画した人々によって編まれた機関誌であったということを示している。

以上見られるように、乃木大尉の殉死を受けて「六合雜誌」は「自殺」とはいかなるものなのかについての特集が組まれた。当時

「六合雜誌」の主筆であった内ヶ崎は、キリスト教徒のみならず信徒や学者などにも「自殺」についての論稿を依頼し論議の活性化を促した。紙面全体を通して乃木大尉の殉死を積極的に評価する声が強し、西洋キリスト教徒の主張する自殺絶対否定論は受け入れられないとする主張がほとんどであった。内ヶ崎の乃木大尉殉死観は詳らかではないが、主筆であり紙面の編集に強い影響力を持った内ヶ崎がかかる殉死を積極的に評価しなかったと考えることはできないであろう。

六 『近代人の信仰』に見る内ヶ崎の思想

内ヶ崎作三郎は大正二年六月に『近代人の信仰』(書醒社書店)という六〇〇頁を越える著作を世に送り出した。明治末期、英国留学中に書いた文章も含まれるなど、明治四十五年を挟んだ内ヶ崎の思想が現れていると考えられる。この書物において、内ヶ崎が強調した価値観を検証することによって、本稿のこれまでの考察を補完したい。

まず、「無意識の偉大」において、内ヶ崎はタイタニック号沈没が多くの教訓を与えたとする。「仰げば北大西洋の夜更けて、星の光牙え、海若また眠りて蕭條の風なく、人類科学の進歩はこの巨城を擁して大西洋を突破するのである。夜は静かであった。不沈没船を標榜したタイタニック号は、今や科学全能を信じて安眠を貪れる幾千の船客を運びつ、大自然の威力を睥睨しつ、ある。」と述べ、

タイタニック号が人類科学の集大成であることを示している。そのタイタニック号が沈没したことに対して内ヶ崎は、「夫と共に海底に沈んだ健気な女」「全然義務の爲めに自己の生命を捨て、七百幾人の婦女を救つた」人などを見て「吾人は実に麗しき天眞の流露、人性の發現を見た。」と評価する。

さらに、ボートに救助されたある男が救いを求める多くの叫びを聞いて「宜しい、諸君おさらば、神の恵み諸君の上にあれ」と叫んで北海の藻屑と消えた。これを内ヶ崎は「この無名の英雄的男子の覚悟は実に人性の真情を發露したものでないか。詩に見るよりも麗しい奥床しい心掛ではないか。これ実に心靈の勝利である。」と記している。このように内ヶ崎によってなされた、タイタニック号事件における「自己犠牲」の精神に対する評価は、先述の永井の見解に見られた乃木大将殉死の評価を類推させるものがある。

また、内ヶ崎は、歴史、とりわけ文明史に精通していたが、「近代人の信仰」に収められた論説を通じて、彼の思考の中に東洋対西洋という対立構図があることを垣間見ることが出来る。

まず、「靈的生命の反抗」において、内ヶ崎は東洋の時代が復活すると次に予言する。すなわち「今や東洋の天地は暗澹たる悲風と殺伐たる硝煙に埋つてゐる」としながらも、東洋人が各所で独立を要求していることを述べ、これは「欧州人の偏見を以て見れば、是れ將に來らんとする黃禍の前兆であらう」とする。しかしこの東洋の動きは「紀元前四世紀波斯の大軍がマラソンの戦いに敗れて以來二千三百年、倒れて立つ能はざりし東洋の元氣が、勃然とし

なる使命の爲めに努力すべきである。」とした。

ここで当時の時代背景を考えてみると、日本は日露戦争に勝利し、大國の仲間入りを果たしたと考えた日本人も多かった時である。また、日英同盟締結により列強と互角の力を持つたと思えるものがあったとしてもおかしくはない。しかし、内ヶ崎は日米摩擦もちらほら見えてくるほど日本が国力を増した時代になつても、以下のように述べ、日本を一等國とは見なさなかつた。すなわち、「日本はまだ第一等國に達してゐぬ。富と健康と學術とに於て、また道德生活の上にてさへも、欧米の列強に後る、こと數歩のみではない。今は國民が列強競争の激烈なるを更に痛切に自覺すべき時である。奮勵すべき時である。而して國民全体の教養を高め、深め、大にして、眞個の大國民に進化せしむるために上下協力し、和合し、精進すべき時である。」とする。彼は欧米列強に対する競争意識を強烈に抱きながら、遅れた日本に精神的文明の時代を訪れさせるためには、國民の精進が一層必要であると鼓舞していたのである。

以上のように、内ヶ崎の文明觀は、十九世紀までの西洋物質文明の時代はまもなく終わり、二十世紀においては東洋の精神文明が時代の主役であるというものであつた。なかでも彼は日露戦争の勝利を評価し、日本海海戦はマラソンの戦いに匹敵するとまで述べている。しかしその一方で、彼が抱く國際社会の現状認識は、あくまで「列強競争の激烈なる」時代であり、我が國は依然として欧米列強の後塵を拝しているとの認識であつた。これらの主張に共通するのは、内ヶ崎が東洋と西洋の差異を強く感じ、西洋に強いライバル意

て挙げたる復活の声ではあるまいか。」と、二千三百年もの間西洋に従属していた東洋が再び立ち上る時が來たことを主張する。その上で、かかる東洋文明の目覚めは日露戦争の勝利が契機となつたと以下のように述べている。すなわち「而して二千年來眠りし東洋國民の爲めに万丈の氣焰を吐き、東洋國民の自覺心を形成したのは實に三十七八年の戦役に於ける奉天或は日本海々戰の殷々たる砲聲の響であつた。之を以て見れば、三十七八年の戦役は實にマラソンの戦に比すべき東西二洋の大戦であつた。かくて東洋文明は再び長夜の眠より醒めた」とする。この内ヶ崎の文章に見出される文明觀には、東洋対西洋という図式があり日本は東洋における先驅者であるとの意識が窺われる。

内ヶ崎の場合、こうした東西対立の図式は、十八、十九世紀は西洋の「物質的文明時代」であり、二十世紀は東洋の「精神的文明時代」であるとの時代的位置づけを含むものであつた。彼は「今や東洋諸國民は先づ物質的文明に於て覺醒の時代に入つた。是れやがてまた精神的文明の覺醒を予言してゐるのではないか」と述べ、物質對精神の二項對立の図式を提示するとともに、物質文明の時代の後に精神文明の時代が到來することを説いていた。「生の力」の本質にみられる、明治と大正の位置付けも、右の如き西洋と東洋の對立図式を支える特徴付けを重ね合わせることに由り行つてゐる。すなわち、「明治の改革は物質的の改革であつた。大正の改革は精神的の改革でなければならぬ。外的文明に憧憬したる吾等の眼を転じて、内的文明の核心に飛び込み、深遠なる思想の發展と、人類進化の大い

識を持つていたことであらう。

ところで内ヶ崎は宗教を生業としていたが、当時の内ヶ崎の根底に在るものを考察するためにも「近代人の信仰」における内ヶ崎の宗教觀を検討したい。内ヶ崎にとつて宗教は、非常にわかりにくい理屈を言つて他宗派を悪く言うものであつてはならず、普遍的なものであるとした。例えば「宗教生活の芸術的内容」において、「宗教は根本原則に於て時代や國家や民族を超越し、千古に照し、万邦に亘りて不易の真理であり、活力である。」と述べ、四海兄弟主義を唱えている。また、「靈的生命の反抗」においては、「キリスト教が社会の進化發展を対岸の火災視し、依然として二千年以前のキリスト教を以て現代人の覺めたる頭に注入せんとしてをる。斯の如き保守的キリスト教が、吾人を満足せしめないのはもちろんのことである。」とし厳格な教義を守るキリスト教を、「保守的キリスト教」と見做しこれに批判を加えている。さらに「現代生活の權威」においては、「人生とは畢竟、科學的生活を意味するのであつて、宗教とは科學的生活と調和するものでなければならぬ。尚一步を進めて言へば、宗教は科學と共に進化するべき性質のものでなければならぬ。」と述べ、科學と矛盾しない宗教を唱えた。この点は、ユニテリアンがいかなるものであるかを見れば理解は容易である。

また、内ヶ崎は後年衆議院議員となり政界で活躍するが、この時代においても積極的に政治を論じようとしていた。「近代人の信仰」における内ヶ崎論説を見ると彼にとり宗教が政治と無縁なものではないことがわかる。例えば「政治の改革か心靈の覺醒か」において、

内ヶ崎は桂太郎の新政黨組織に批判を加え、宗教者の立場より政治を論じるとしながら、「宗教が理想の建設、生命の促進といふが如き内的活動の根柢であり、政治や凡べての社会運動がその発現たるに過ぎざるを以て見れば、政治対宗教の問題は極めて密接なものであつて、政治の根柢は宗教の所謂精神生活に彩色せられたる者でなければならぬ。」と述べた上で、「一体形而上学的事象と雖ども実社会の実存在を離れて絶対的に独立し得るものでない。」と主張していた。宗教が基礎ではあるものの、その宗教の世界は政治の世界と全くはなれたものではなく、宗教は実社会と遊離したものであつてはならないというのが内ヶ崎の主張である。これは内ヶ崎が現実を直視した人間であることを表すと同時に、後年政治家になる人物の萌芽がここに見られるとも言えよう。

以上見たように、大正二年に発行された内ヶ崎作三郎の著作「近代人の信仰」は、以下の点で内ヶ崎の明治天皇崩御観を理解する際の一助となる。

第一に、東洋対西洋という文明の対立構図と、これに支えられた時代認識である。それは、十九世紀まで続いてきた西洋の物質文明時代が、二十世紀になって日本など東洋諸国の勃興により精神文明時代にとってかわるとの予測を含むものであつたが、そこには西洋に強い対抗意識を持ちつつ、その軸足をあくまで東洋、とりわけ日本に置き、かかる時代の到来に向けその精神を鼓舞する姿勢を読み取ることができた。

第二には、内ヶ崎の宗教観は政治と密接な関連を持ち、どちらから

一方だけの世界であつてはならないと主張したことである。宗教は形而上の世界ではあるが、現実社会から超越して存在することはできないとの認識を基盤としている。すなわち、内ヶ崎は、現実存在する日本の社会と遊離したキリスト教を暗に批判しているのである。これは、西洋文明の象徴としてのキリスト教をそのまま日本に輸入するのではなく、日本の風土に合わせて現実的に解釈していいという内ヶ崎の姿勢を生み出したといえる。そして彼が明治天皇崩御に際して示したように本来のキリスト教徒としての属性よりも日本人としての属性を優先させたことは右の姿勢と無関係ではないであらう。

七 結 語

キリスト教徒であつた内ヶ崎作三郎は明治天皇崩御に際し、自ら主筆を務めるキリスト教ユニテリアン派の機関誌「六合雑誌」において明治天皇の業績を称えた。続く乃木大将の殉死という事件を受けて「六合雑誌」は特集を組み、自殺についての論稿が数多く掲載されたが、その内容は乃木大将の殉死を積極的な自殺であり武士道の表われであるとして高く評価する論説で占められた。

本来自殺を絶対的に認めないはずのキリスト教徒たちが乃木大将の殉死を高く評価したことは、「六合雑誌」を発行する統一基督教会（ユニテリアン派）が、その設立に福沢諭吉が関与していることから分かるように、他の原理的なキリスト教徒と異なり三位一体説

を信じないという現実的な教義を採っていたことに原因がある。また、「六合雑誌」に関わつていた内ヶ崎の友人、吉野作造や小山東助、永井柳太郎は宗教のみならず現実の社会問題に関心のあつた人物であつた。彼らの影響から内ヶ崎及び「六合雑誌」が宗教の世界にとどまらず広く政治の世界との関わりを持つ思考を持つにいたつたのであると言えるのではないか。

また、大正二年に発行された内ヶ崎作三郎の著作「近代人の信仰」は、本稿の主題を補完する資料であるといえる。なかでも特徴的な点は、この著作全般に見られる東洋対西洋の文明対立という視点である。内ヶ崎によれば、十九世紀までの世界は、西洋の物質文明であつた。ところが、二十世紀に入って東洋の諸民族が独立の動きを示し始めた。さらに日本が日本海海戦でロシアに勝利したことなどから、二十世紀は東洋の精神文明時代であるという主張を展開している。そこには、キリスト教徒ではありながらも東洋あるいは日本に軸足を置いた、西洋に対する強い対抗意識を見出すことができる。かかる対抗意識は、内ヶ崎を中心とするキリスト教徒が西洋的価値観に拘泥されることなく、自分の周囲に存在する日本の価値観を重視し、西洋対東洋の二者択一の中で後者を選ぶことをよしとすることにつながつた。そのために彼を中心とする人々は、西洋文明のキリスト教を受け容れながらも、日本的価値観と対峙した際には、独特の解釈を施しながらこれを肯定していったのである。

明治天皇崩御という事件は、これを契機に薩長藩閥の影響力が低下していくという点で、近代日本政治史上における大きな転換点で

あつた。明治という国家の隆盛期を経験した後の日本は、制度上、文化上、あるいは産業上においても、西洋文明を十分に吸収し、欧米中心の国際政治という舞台にも踊り出るまでに成長を遂げていた。続く大正時代には「大正デモクラシー時代」が訪れる。この時代も西洋文明の大きな影響を受けた結果であると位置づけることができよう。しかし、一方で日本人はその後ナショナリズムを高揚させ、昭和時代は戦争の時代になっていく。

以上の時代背景を踏まえた上で、内ヶ崎作三郎が明治天皇崩御時および乃木大将殉死時に示した反応を考えると、それは西洋文明と日本的価値観の邂逅に際して日本人が採つた思考様式の一事例としてだけでなく、その後の昭和戦前中期の我が国の思想的展開を理解する一助にもなるのではないだろうか。すなわち、昭和期に多く見られる一種のアジア主義とも思想的近似性を持ち、さらに、彼の東洋対西洋の対立図式およびその背後に存在する西洋への対抗意識は、戦中期に日本を席卷する「東亜新秩序」、「大東亜共栄圏」の理想を根底において支え、突き動かす思考様式でもあつたと指摘することもできる。

(1) 明治四十五年当時の「六合雑誌」は、キリスト教ユニテリアン派統一基督教会の機関誌的存在であり、オクスフォード大学留学中にユニテリアンとなつた内ヶ崎作三郎が牧師兼編集者となつて宗教的自由主義を唱えた。ユニテリアンについては、鈴木範久「明治宗教思潮の研究——宗教学事始——」（東京大学出版会、一九七九年）四四―六四頁）を参照。

- (2) 大正時代を通しての寄稿者として、吉野作造、新渡戸稲造、鈴木文治、安部磯雄などがあげられる。主な寄稿者がキリスト教徒であったこともまた事実である。
- (3) 竹中正夫「内ヶ崎作三郎における人間と文化」(同志社大学人文科学研究所叢書 XVIII・「六合雑誌」の研究)〈教文館、一九八四年〉。
- (4) 内ヶ崎作三郎に関する既存研究は少ない。これは戦災によって内ヶ崎の自宅が焼失し、二十万冊といわれる蔵書など内ヶ崎に関する一次資料が滅失してしまったためであるといわれる。
- (5) 「新人」は本郷教会の月刊機関誌。内ヶ崎は本郷教会の牧師である海老名弾正の影響を受けて、明治三十五年本郷教会に通うようになった(小野寺宏「愛天内ヶ崎作三郎資料」〈第三集、平成八年〉)。また、吉馴明子「海老名弾正の政治思想」(東京大学出版会、一九八二年)によれば、内ヶ崎が師事した海老名は「キリスト教を欧米文明から剥離して日本の伝統的宗教と接合した」人物であると述べている。したがって、日本の価値観を否定しないキリスト教徒である内ヶ崎を生み出した大きな要因の一つとして海老名の教えをあげることができよう。
- (6) 「議会制度百年史・衆議院議員名鑑」(大蔵省印刷局、平成二年)九三頁、小野寺宏「愛天内ヶ崎作三郎資料」(第一集、第二集、平成七年・平成八年)を参照。
- (7) 浄土真宗の著名な僧である島地黙雷の子である。
- (8) 穴戸慶子「アンネ・S・ブゼル著『バイブル・クラス物語』」および和敬子「『六合雑誌』とA・S・ブゼルの弟子たち」(いずれも大正デモクラシー研究会編「大正デモクラシー研究2」(一九九六年)の両論文にバイブル・クラスのメンバーが内ヶ崎に大きな影響を与えたことを論じている。
- (9) 明治十二年宮城県気仙沼町出身の政治家、評論家。号の鼎浦は、気

- 仙沼湾の古名にちなんだもの。少年の頃、代議士島田三郎の政談演説を聞き、政治家を志す。中学(仙台一中)の上級に吉野作造がおり、また第二高等学校の同窓に内ヶ崎作三郎がいて、この二人とは死ぬまで交友関係を保った。明治三十六年東京帝国大学哲学科を卒業。東京毎日新聞記者、早稲田大学講師、関西学院文庫長、横浜貿易新報主筆を経て大正四年衆議院議員に初当選。当選二回を数えるも大正八年、三十九歳で死去(河北新報社編「宮城県百科事典」(河北新報社、昭和五十七年)一五八頁、「議会制度百年史・衆議院議員名鑑」(大蔵省印刷局、平成二年)一六六頁、西田耕三編「鼎浦小山東助の思想と生涯」(鼎浦小山東助顕彰会、昭和五十四年)を参照)。
- (10) 内ヶ崎作三郎「小山鼎浦の宗教思想」(「六合雑誌」、大正八年十二月)を参照。
- (11) 「新人」(二十巻十号、大正八年十月)。小山東助の死に際して吉野が書いた追悼文である。
- (12) 同右、「新人」(二十巻十号、大正八年十月)。
- (13) 同右、「新人」(二十巻十号、大正八年十月)。
- (14) 内ヶ崎作三郎「英国便り」(早稲田学報、明治四十二年二月)を参照。
- (15) 内ヶ崎作三郎「見識ある英国の労働者」(「友愛新報」(大正三年五月十五日、友愛新報社)を参照。この記事は、総同盟五十年史刊行委員会編「友愛新報集成—大正昭和労働運動社会主義研究資料—」(柏書房、一九六四年)を参照した)。
- (16) 友愛会を設立した鈴木文治もまた宮城県出身であり、この頃鈴木も「六合雑誌」の編集に関与していた。尚、「友愛新報」は鈴木文治が設立した我が国労働組合の先駆、友愛会の機関誌であり、主として全国各地の労働運動家に読まれた。この頃、鈴木文治は内ヶ崎の秘書を務

- めていた(前掲、「明治宗教思潮の研究—宗教学事始—」六二頁を参照)。
- (17) 小野寺宏「愛天内ヶ崎作三郎資料」第四集(平成八年)を参照。
- (18) 内ヶ崎作三郎「欧米に於ける祖先記念の風習」(「六合雑誌」、明治四十五年二月)を参照。
- (19) 同右「欧米に於ける祖先記念の風習」。
- (20) 同右「欧米に於ける祖先記念の風習」。ここで内ヶ崎は「日本の神社は宗教の機関にあらずして祖先崇拜の場所に過ぎぬ」としている。
- (21) 初当選を果たした内ヶ崎は早速「改造」に寄稿し、護憲三派内閣の成立を訴えると同時に「現下の政情が大に英国最近の政情に類似してゐる」とし英国の労働党の台頭を憲政会の勝利になぞらえた(内ヶ崎作三郎「総選挙と護憲内閣の前途—政局の将来—」(「改造」、大正十三年六月)。
- (22) 昭和五年第十七回総選挙に落選するが、翌年補欠選挙で当選する。昭和十二年六月には、第一次近衛文麿内閣の文部政務次官、昭和十四年四月には、民政党総務・幹事長に就任した。昭和十五年八月には、大政翼賛会に入会した(前掲、「議会制度百年史・衆議院議員名鑑」九三頁および前掲、「愛天内ヶ崎作三郎資料」〈第一集、第二集〉を参照)。
- (23) 「ユニテリアン教の要領」(郵便報知新聞、明治二十年五月七日、八日、十日)を参照。
- (24) 前掲、「明治宗教思潮の研究—宗教学事始—」、四七一—五〇頁。
- (25) 「今度ユニテリアンの僧にてナップと申人日本へ参候に付、其出発前、日本の言語風俗を取調度に付、貴様が其家へ参るべきよし」(「福沢諭吉全集」第十八巻〈岩波書店、昭和三十七年初版、昭和四十六年再版〉一七二頁。明治二十年十月十三日付福沢一太郎宛書簡。なお、この資料は「明治宗教思潮の研究—宗教学事始—」において明ら

- かにされている。
- (26) 前掲、「明治宗教思潮の研究—宗教学事始—」、四九頁。
- (27) 「友愛新報」の広告においてこのように自称している。例えば、前掲「友愛新報」(大正元年十二月三日)を参照。
- (28) 「古来の大偉人を視ますと、大要に統一基督教(渡辺注:ユニテリアン)の人々が多い。ナイチンゲール、フランクリン、エマソンなど皆なユニテリアンであつたのを見ても分る」。(前掲、「友愛新報」(大正元年十二月三日)。
- (29) 「東京ユニテリアン教会綱領」(「六合雑誌」三六九号、明治四十四年十月)を参照。
- (30) 内ヶ崎作三郎「我が信仰の告白」(「六合雑誌」三六九号、明治四十四年十月)を参照。表題には「九月二十四日東京ゆにてりあん教会に於ける説教」と付記されている。
- (31) 同右、「我が信仰の告白」(一)を参照。
- (32) 同右、「我が信仰の告白」(二)を参照。
- (33) 同右、「我が信仰の告白」(三)を参照。
- (34) 内ヶ崎作三郎「我が信仰の告白」(承前)、「六合雑誌」三七〇号、明治四十四年十一月)を参照。
- (35) 同右、「我が信仰の告白」(承前)を参照。
- (36) 「崩御前後」(「六合雑誌」三八〇号、大正元年九月)に詳述。この記事は「大行天皇の崩御は、我等国民の哀痛悲嘆極まり」という文章に始まり、「茲に国民の至誠は疑つて未曾有の宗教的發現となりぬ」と述べて、崩御の日における明治天皇の「御容態」を詳細に記録している。また、「明治天皇」との御追号がなされたことも報じている。
- (37) 小僧記「編集余録」(「六合雑誌」三八〇号、大正元年九月)。
- (38) 内ヶ崎作三郎「バルトロメーの宗教的大芸術」(「六合雑誌」三八〇

号、大正元年九月。

(39) 内ヶ崎作三郎「天佑の明治日本」(『六合雑誌』三八〇号、大正元年九月)。

(40) 同右「天佑の明治日本」。

(41) 同右「天佑の明治日本」。

(42) 同右「天佑の明治日本」。

(43) 明治天皇の御製は「四方の海みなはらからと思ふ世に」など波風の立ちさわぐらん」である。

(44) 「大喪と基督教」(『六合雑誌』三八〇号、大正元年九月)において、
弔詞が掲載された。そのなかには「大行天皇ノ聖徳天ノ如クノ聖恩海ノ如ク、臣等ノ隆治ノ下ニ在リテ文明ノ恩沢ニ浴シ信教ノ自由ヲ享ク、臣等感荷何ゾ堪ヘン、茲ニ大喪ニ会シ洵ニ恐懼ニ絶ヘズ、謹テ全国ニ於ケル基督教各派同盟ヲ代表シテ痛哭哀傷の微衷ヲ表シ奉ル。明治四十五年七月三十日ノ日本基督教各派同盟副会長ノ井深梶之助ノ小崎弘道」などと記されている。

(45) 「明治神宮建設協議会」(『六合雑誌』三八〇号、大正元年九月)。
この記事に関しては事実報道のみであるが、決定された覚書を細かく掲載しており、「六合雑誌」として明治神宮建設に反対する記述は見られない。さらに、三八一号「編集局だより」において、編集委員は、明治神宮建設の議に言及した上で、「神宮建設以外に於て、果して更に世界的にして、更に適當なる施設はなきや。」と述べている(小僧「編集局だより」(『六合雑誌』三八一号、大正元年十月)を参照)。

(46) 皇紀二千六百年を迎えた際にも、内ヶ崎は民政党の機関紙において「明治天皇の不業は神武天皇の鴻業に次ぐべき皇國の一大飛躍にして、今日の我國發展の原動力となられたのである」と述べて、明治天皇をたたえている(内ヶ崎作三郎「皇紀二千六百年を迎へて我が党の使命

を想ふ」(『民政』、昭和十五年一月)。

(47) 例えば、野口精子は「大正の秋」と題して十首の和歌を書いており、皓天生「疑問の日本国民性」においても、明治天皇崩御に際して「平素宗教の宗の字すらも口にしたことのない人々が、急に熱心なる信者と早変わりし、其神体の如何をもさへも究めずして、馳せ参ずる人々の多かつたこと」に批判を加えているなど明治天皇崩御関連記事が多く見られる。尚、小野寺安「愛天内ヶ崎作三郎資料」第五集(平成十年)は、鈴木文治が内ヶ崎の号である「愛天」、吉野の号である「翔天」にあやかって「皓天」と称したということを明らかにしている。したがって、「疑問の日本国民性」は鈴木文治の評論であると見られる。

(48) 「乃木大将夫妻の殉死」(『六合雑誌』三八一号、大正元年十月)。

(49) 三並良(慶應元ノ昭和十五)は、明治から昭和時代前期にかけての自由キリスト教思想家でドイツ語学者。旧制一高の教授を務め、明治四十二年より「六合雑誌」の編集に携わる(国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第十三巻(吉川弘文館、平成四年)を参照)。

(50) 三並良「乃木大将を哭す」(『六合雑誌』三八一号、大正元年十月)。

(51) 加藤「国家的悲劇の背景」(『六合雑誌』三八一号、大正元年十月)。

(52) 中野柏葉「キリスト教と自殺」(『六合雑誌』三八一号、大正元年十月)。

(53) 加藤安智「仏教の生死観」(『六合雑誌』三八一号、大正元年十一月)。
加藤安智(明治六ノ昭和四十)は明治から昭和時代にかけての宗教学者、神道学者。陸軍教授士官学校付・明治聖徳記念学会常務理事・同付属研究所長・東京帝国大学助教授・国学院大学教授などを歴任(国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第三巻(吉川弘文館、昭和五十八年)を参照)。

(54) 高木壬太郎「自殺論」(『六合雑誌』三八二号、大正元年十一月)。

高木壬太郎(元治元ノ大正十)は明治・大正時代の神学者、教育家。教会牧師などを経て、明治四十一年、青山学院神学部専任教授、大正二年に青山学院院长に就任した。

(55) 山岸光宣「独逸近代劇に現はれたる自殺」、野村善兵衛「ストア哲学の自殺観」、藤井健治郎「自殺に関する西洋学者の意見」(『六合雑誌』三八二号、大正元年十一月)など。

(56) 永井は明治十四年生、東京都出身の政治家。明治四十四年小山東助らと共に統一基督教教会に入会している(『六合雑誌』三七二号、明治四十五年一月)。明治三十八年早稲田大学政治経済学部政治科卒。明治四十一年、マンチエスター・カレッジ(オクスフォード)卒。早稲田大学教授の傍ら雑誌「新日本」の主筆となった。加藤高明内閣、第一次若槻内閣の外務参与官、浜口内閣の外務政務次官、斎藤内閣の拓務大臣、第一次近衛内閣の通信大臣、阿部内閣の通信大臣兼鉄道大臣を歴任。また、北陸毎日新聞社長、日本放送電設立委員長、立憲民政党総務、幹事長、政務調査会長、大政翼賛会総務、東亜局長となる。当選八回。

(57) 永井柳太郎「統計学上より見たる自殺」(『六合雑誌』三八二号、大正元年十一月)。

(58) 永井はこの論文において「世の多くの人々が今日日本に行われてる自殺の多くが、如何なる性質のものであるかを究めずして、妄りに自殺そのものを以て武士道の発現なるが如く讚美するのを危険なりとする」と述べ、他の識者よりも冷静な判断を加えている。

(59) 井深梶之助は会津藩出身であり、明治四十五年当時、数え年五十九歳であった。明治学院総理、日本基督教青年会同盟委員長、基督教各教派同盟会長、日本基督教大会議長等の要職にあり、「文字通りのキリスト教会の指導者」であったという(工藤英一「社会思想的にみた明治天皇の死とキリスト教——井深梶之助の場合——」(『近代日

本社会思想史研究」(『教文館』一九八九年)を参照)。

(60) 工藤英一「社会思想的にみた明治天皇の死とキリスト教——井深梶之助の場合——」(前掲「近代日本社会思想史研究」、三三七頁)を参照。

(61) 内ヶ崎作三郎「近代人の信仰」(警醒社書店、大正二年)を参照。

(62) 例えば、内ヶ崎「祖国の政治家、学者、文士に対する要求」(前掲「近代人の信仰」)がそうである。

(63) 内ヶ崎「無意識の偉大」(前掲「近代人の信仰」、二十四頁)を参照。

(64) 内ヶ崎「霊的生命の反抗」(前掲「近代人の信仰」、一〇六頁)を参照。

(65) さらに、前掲「祖国の政治家、学者、文士に対する要求」においては、論壇における西洋追隨の立場を批判して以下のように述べている。「日本の青年評論家の努力は大に多とすべし、されども諸君が欧州の新文芸にのみかおれて、日本民族の現在と将来の發展とを觀察すること能はずとせば、諸君の折角の努力は空虚ならんのみ。諸君は欧米を望むと共に、滿韓清を眺めなければならぬ、諸君の周囲の国民の生活を研究せねばならぬ」(内ヶ崎「祖国の政治家、学者、文士に対する要求」(前掲「近代人の信仰」、三三三頁)を参照)。この文章から、内ヶ崎が西洋文明よりも自らの周囲であるアジア諸國の文明を見つめるべきであると主張していることがわかる。ここにも内ヶ崎の東洋重視の思想が現れているといえよう。

(66) 内ヶ崎「生の力」の本質」(前掲「近代人の信仰」、二〇五頁)を参照。

(67) 内ヶ崎「祖国の政治家、学者、文士に対する要求」(前掲「近代人の信仰」、三三五頁)を参照。

(68) 内ヶ崎「宗教生活の芸術的内容」(前掲「近代人の信仰」、四十二頁)

を参照。

(69) 内ヶ崎「靈的生命の反抗」(前掲「近代人の信仰」、八十八頁)を参照。

(70) 内ヶ崎「現代生活の權威」(前掲「近代人の信仰」、二一九頁)を参照。

(71) 内ヶ崎「祖国の政治家、学者、文士に対する要求」(前掲「近代人の信仰」、二四〇頁)を参照。

(72) 内ヶ崎「祖国の政治家、学者、文士に対する要求」(前掲「近代人の信仰」、二四六頁)を参照。

(73) しかしながら、内ヶ崎が一般的に言われていたような「軍国主義者」であったという判断を下すことはできない。彼は満州事変後も、議会政治を否定し独裁専制政治を行おうとする勢力に対し批判的で、独裁専制政治は「是れ全く憲政の破壊であると同時に、明治大帝勅語の一節に逆行するものにして、其の愚や笑ふべく、其の危険や図るべからざるものがあると謂はねばならぬ。」としている(内ヶ崎作三郎「議会政治か独裁政治か」へ「民政」昭和七年五月)を参照)。

【追記】 本稿の執筆にあたり、慶應義塾大学法学部玉井清教授に貴重な時間を割いて頂き懇到なる御指導を賜った。また筆者の仙台一高時代の恩師である国分芳雄先生、仙台市在住の内ヶ崎研究家でいらつしやる小野寺宏さんより貴重な御助言、御教示を頂いた。ここに記して感謝の意を表したい。

紛争をめぐる国際環境と法

——戦争違法化の一〇〇年の系譜——

村 田 祥 子

(赤木研究会三年)

序 説

- 一 第二次世界大戦以前の世界
 - (一) 外交手段としての戦争
 - (二) 無差別戦争観と勢力均衡論の崩壊
- 二 第二次世界大戦期の世界
 - (一) 無秩序の中の行動原則
 - (二) 植民地主義の遺産
 - (三) 国益と道義の相剋
- 三 第二次世界大戦以後の世界
 - (一) 国際人道法の発達
 - (二) 二つの軍事裁判
 - (三) 正戦論への回帰と違法化の前進
- 四 冷戦後の世界
 - (一) 冷戦終結と戦争違法化

序 説

- (一) 核をめぐる法体系
 - (二) 大国のディレンマ
- 結 語

一世紀という時は、しばしば大きな転換を含む一つの時代を形成する。今からおよそ一〇〇年前の世界を振り返ってみると、それはヨーロッパではバルカン進出をめぐる帝国主義国家間の複雑な同盟外交とその圧力に抵抗するナシヨナリズムとの摩擦が苛烈化し、第一次世界大戦への火種が確実なものとなっていた頃であり、アジアでは日清戦争終結後列強による中国分割が展開され始めた時期で